長崎国際大学教育基盤センター紀要　第２巻　2019年３月　27頁～54頁

原著論文

初年次教育の深化に向けて
――ホスピタリティ概論の分析から――

井上英也[1)]，藤原俊幸[2)]，松永雅弘[3)]，
松本欣也[4)]，原哲弘[1)]，乙須翼[1)]，
森尾真之[1)]，野田健[1)]，ヴィラーグ ヴィクトル[1)]，
小田和人[5)]，藤井俊輔[5)]，田中啓太郎[2)]，
藤井佑樹[2)]，井上龍二[6)]，坂本亘[7)]，
松口博明[8)]，福成哲夫[8)]，橋本優花里[9)]，
小林隆昌[10)]，橋本健夫[1)]

([1)]人間社会学部、[2)]薬学部、[3)]IR 室、[4)]教務課、[5)]健康管理学部、[6)]薬学事務室、
[7)]総務課、[8)]会計課、[9)]長崎県立大学、[10)]広島大学大学院）

Analyzing Class room Survey to Broaden First Year Experience in Nagasaki International University
—In the Case of Introduction to Hospitality—

Hideya INOUE[1)], Toshiyuki FUJIWARA[2)], Masahiro Matsunaga[3)],
Kinya MATSUMOTO[4)], Tetsuhiro HARA[1)], Tsubasa OTOSU[1)],
Masayuki MORIO[1)], Ken NODA[1)], Virag VIKTOR[1)],
Kazuto ODA[5)], Shunsuke FUJII[5)], Keitro TANAKA[2)],
Yuuki FUJII[2)], Ryuji INOUE[6)], Takasi SAKAMOTO[7)],
Hiroaki MATSUGUCHI[8)], Tetsuo FUKUNARI[8)], Yukari HASHIMOT[9)],
Takamasa KOBAYASHI[10)] and Tateo HASHIMOTO[1)]

([1)]Faculty Human and Social Studies, [2)]Faculty of Pharmaceutical Science, [3)]IR office,
[4)]student affairs office, [5)]Faculty of Health Management,
[6)]student affairs office of pharmacy, [7)]general affairs section, [8)]accounting section,
[9)]University of Nagasaki, [10)]graduate school of Hiroshima University）

Abstract

This paper analyzed two different kinds of classroom survey data from a first-year experience course entitled, Introduction to Hospitality in order to broaden and improve first year experience in Nagasaki International University.　One was a survey by clickers（i.e. a student response system）and the other was a paper-based survey.　These were the same surveys as those used in last year's research. Introduction to Hospitality started in 2017 and has continued with a few of improvements during this second year.　The improvement was based on results of previous research in the last year, i.e., 1）Second and third grade students participated in classes as staff to encourage students' learning motivation, 2）Academic staff were recruited to teach in classes on a voluntary basis rather as a mandatory requirement.

Data of last year and this year was compared and with the following results.

The result of the survey by clicker.

1）Reporting of concerns about mind and body was more frequent in 2018 than those of 2017.

2）Participation in an open campus was improved in 2018 compared to 2017.　Especially participation

more than once and participation of families both increased in 2018.

3）Understanding of campus orientation and department orientation were both higher in 2018 than those of 2017.

The result of the paper-based survey.

1）Communication in the classroom such as “having opportunity to talk with students who belong to a different department” and “knowing different opinions from students who belong to a different department” was better in 2018 compared to 2017.

2）Evaluation of a class about understanding hospitality was higher in 2018 than those of 2017.

3）There was an increase in the amount of feedback from open-ended response questions about student impressions of the classes in 2018 compared with 2017. In order to quantify this feedback, we counted the number of characters and used this data for statistical analysis.

Although the results of a survey by paper in each department indicated some issues, overall results suggested that students' participation became better in the second year. Peer support by second and third grade students and the positive attitude of academic staff in a class might have led to these better results. Students' characteristic seemed to change from last year to this year in the result of a survey clicker and we need to pay attention the change.

Key words

higher education, first year experience, Collaborative work between faculty and academic staff, peer support.

要　旨

本研究は、初年次教育の深化を図るために、その一つの科目である「ホスピタリティ概論」を対象として、受講生の感想等を分析し、授業の改善を図ることを目的としている。2017年度に開設された「ホスピタリティ概論」は、２年目を迎えるにあたって、前回の調査で明らかになった課題の幾つかに改善を加えて実践された[1)]。加えられた改善点は、上級生を学生スタッフとして雇用し、受講生の学修活動の促進を図ること、そして各課割り当てからボランティアの事務職員を担当にし、教職協働体制の円滑化を図ることの２点である。

昨年度同様のクリッカー調査とアンケート調査を実施し、２年間の結果の比較・分析を行った。この結果、次のことが明らかになった。

クリッカー調査

①　平成30年度の方が29年度よりも、心身の不安を訴える１年生が多いこと。

②　入学の動機づけとなるオープンキャンパスへの参加に関しては、平成30年度の方が、複数回参加や家族の参加が多くなっており、参加しなかった割合が低くなっていること。

③　全学オリエンテーションと学科別オリエンテーションの理解度に関しては、共に平成29年度の方が高い数値を示していること。

アンケート調査

④「他学科の人とおしゃべりする機会が持てた」や、「他学科の人の意見を聞くことができて有意義だった」という授業内でのコミュニケーション関しては、平成30年度の方が高い評価が得られていること。

⑤「ホスピタリティを理解する上で、この授業に合格点を与えることができる」に関しては、平成30年度の方が高い評価が得られていること。

⑥　自由記述欄の文字数の調査では、平成30年度の方が高い数値になっていること。

上述の①～③に示されているように、年度によって学生の質的な変化が生じているように見え、今後の動向を注視しなければならないことが明らかになった。また、④～⑥の結果からは、今年度の改善点である学生スタッフの活用によって、「ホスピタリティ概論」における学生の学修活動の活性化をもたらしたと判断する事ができる。しかし、他の項目では学科による差も見られ、課題が生じているといえる。

キーワード

高等教育、初年次教育、教職協働、ピアサポート

1．はじめに

筆者が所属する大学においては、平成28年度にディプロマポリシーを始めとした3ポリシーの制定がなされた。続いて、その実現の一歩として、平成29年度から「ホスピタリティ概論」、「茶道文化Ａ」、「教養セミナーＡ」からなる初年次教育が、全学一斉に1年次のカリキュラムに組み込まれた。「茶道文化Ａ」は、必修とする学科も存在していたが、全学一斉は初めてのことであり、「教養セミナーＡ」も、全学科で同じ内容での実施は、初めての試みであった。一方、「ホスピタリティ概論」は、従来の科目を一新して全学生対象科目として生まれ変わった。これらの科目を初年次教育と位置付けたのは、次の理由からである。

本学は、基本理念に人間尊重を謳い、その具体像としてホスピタリティの獲得を掲げている。そして、ディプロマポリシーには、所定の単位数を修得し、ホスピタリティを構成する諸能力（専門力、情報収集・分析力、コミュニケーション力、協働・課題解決力、多様性理解力）を身に付け活用できる人物に学士を授与すると明記されている。この実現は、4～6年間の学士課程教育に待つものであるが、この教育に主体的に取り組む心身の基盤が不可欠となる。この形成を、3つの科目に託したのである。つまり、「教養セミナーＡ」は、大学での学修の意味を理解し、学修のための技法の獲得や専門科目へのあこがれ形成をねらいとし、「茶道文化Ａ」は、理念のモットーとして掲げられている「いつも、人から。そして、心から。」を茶の湯の精神から学ぶことを大きなねらいとしている。そして、「ホスピタリティ概論」は、建学の理念であるホスピタリティとは何かを学ぶことによって、所属大学の素晴らしさをより深く認識するとともに、学科混合のクラスの中での学びを通して、コミュニケーション力や課題解決力及び多様性理解力の基礎を培うことをねらっている。

社会の変化や18歳人口の減少に伴い大学に入学する学生は、多様化する傾向にある。この状況の中で、社会の負託に沿った大学教育を展開していくためには、初年次教育をより充実することが必要となる。本研究は、初年次教育の深化のために、「ホスピタリティ概論」を取り上げ、昨年度と本年度との調査結果を比較し、新たな課題を見つけ、解決に向けた方策を模索することを目的にしている。

2．平成30年度の改善点

平成29年度の「ホスピタリティ概論」の実施状況や調査結果は、前報に記載している[1)]。その中で指摘した課題は、大きく3つである。一つは、教室の改善であり、一つは、学生の学修活動の促進であり、もう一つは、教職協働の円滑の促進であった。

これらを検討した結果、最初に掲げた教室改善の問題であるが、平成30年度は着手できなかった。それは、各学科ともに時間割が過密となっており、全学同時に授業を実施するとなれば、平成29年度の状況を大きく変えることになり、それは不可能と判断したからである。その代わりに、受講生の評価が比較的低かった内容を改善し、臨むことにした。

ただ、二つ目と三つ目の課題については、改善を積極的に進めた。つまり、受講生の主体的な活動を促すために、上級生を、学生サポーターとして起用し、各班に一人ずつ配置することにした。授業開始前には、学生サポーターを集め、その役割についての研修（SD）を行った。さらに、授業を担当する事務職員に関しては、平成29年度の場合は、事務部の各課に割り振ったが、平成30年度はボランティアを募り、授業担当に前向きな事務職員を採用し、事前研修も行った。

また、クリッカー等の機材についても昨年度の反省をもとに改善を加え、授業時に反応不良という不測の事態を招かないように準備を行った。

3．クラス編成及び調査方法

平成30年度の「ホスピタリティ概論」の対象学生数は、520名である。これを各学科均等に振り分け、16班（約33名）を編成した。そして、1班～8班をＡ班、9班から16班をＢ班という2クラスを編成した。1回目から10回目までの展開にあたっては、この学科混合の班を基本形とし、講義形式の場合は、上述の2クラスで大講義室を使って行い、受講生の活動が主になるときは、4班を一つの教室に収容し、各班の活動をさせた。一方、11回から15回は、各学科に分かれて、各学科特有の課題を学ぶ形をとって

いる。本年度のシラバスは、巻末資料１として掲げた。

本研究は、前報同様、１回から10回までの授業を対象とし、「ホスピタリティ概論」の第１回目あるいは第２回目に行うクリッカー調査と第10回目に行うアンケート調査から成り立っている。クリッカーの質問項目とアンケート項目は引き続き同じものを使用したので、前報を参照して頂きたい。

なお、「ホスピタリティ概論」の受講生の総数は、平成29年度が497名、平成30年度が513名であるが、調査が行われた時間に出席していた人数は異なるため、調査対象人数は、結果の記述内に示している。

４．調査結果

クリッカーによる調査結果

授業１回目と２回目に、クリッカーを使って入学直後の学生の状況や大学に対する印象等を調査した。質問項目は、平成29年度と同じである[1)]。クリッカーを使用して５年になるが、学生の本音が聞ける手軽な機材である。特に、学生の状況を的確に把握し、迅速な対応が求められる入学間もない学生の支援には有効なツールとなる。全ての質問に対する回答状況については、参考資料２として巻末に掲げた。ここでは、平成29年度と30年度に有意な差が見られる項目を中心に述べる。調査対象者は表１の通りであるが、分析においては、所属先不明や無回答等については除外している。

表１　各年度における調査対象人数

学科	平成 29 年度	平成 30 年度
A	203	217
B	62	52
C	85	72
D	112	95
合計	462	436

ａ．体への不安は？

入学直後の学生の身体についての不安を尋ねた結果の回答分布を、図１－１と図１－２に示す。

それぞれの回答に１～５の数値を与え（１：全く不安なし、２：不安なし、３：どちらとも言えない、４：不安、５：非常に不安）、各年度の学科の平均値を求め、分散分析を行った。各学科の年度毎の平均値（$\overline{X}$）と標準偏差（SD）については、表２として示している。その結果、平成29年度と30年度を比較すると、体に対する不安に差が認められ（$F(1,818)=21.70$ $p<.001$）、30年度が29年度に比べて有意に高いことが明らかになった。また、学科間でも有意な差が見られ（$F(3,818)=3.40$, $p<.05$）、Tukey 法による多重比較を行ったところ、Ｄ学科はＡ学科より不安が高いことが示された。

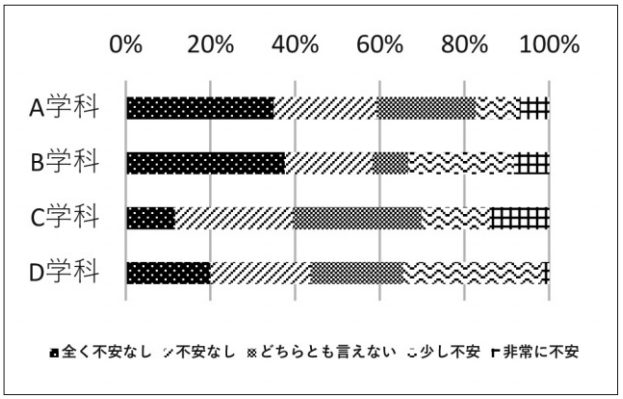


図１－１　平成29年度の回答分布

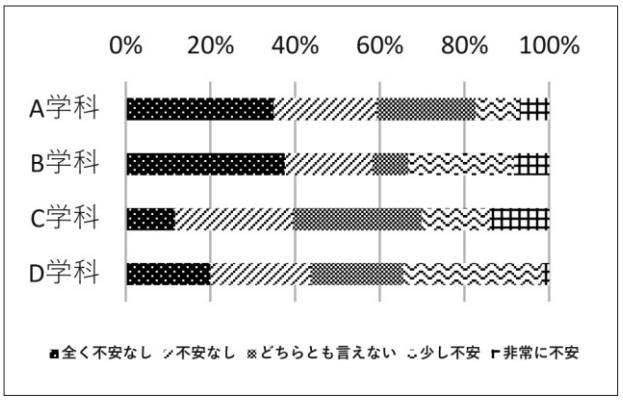


図１－２　平成30年度の回答分布

表２　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\overline{X}$	SD	$\overline{X}$	SD	$\overline{X}$	SD
A	2.1	1.1	2.6	1.4	2.4	1.3
B	2.1	1.2	2.8	1.5	2.4	1.4
C	2.5	1.2	2.7	1.3	2.6	1.2
D	2.3	1.3	2.9	1.3	2.7	1.3
合計	2.3	1.2	2.7	1.4	2.5	1.3

b．精神的な不安は？

精神的な不安を尋ねた結果回答分布は、図２－１と図２－２である。

ａ．と同様な手法を用いて、各学科の平均値を求め、分散分析を行った。各学科の年度毎の平均値（$\overline{X}$）と標準偏差（*SD*）については、表３として示している。その結果、平成29年度と平成30年度を比較すると、精神的な不安に差が見られ（$F(1,805)=4.48$ $p<.001$）、30年度が29年度に比べて有意に高いことが明らかになった。また、学科間でも有意な差がみられ（$F(3,805)=7.53$, $p<.05$）、Tukey 法による多重比較を行ったところ、Ｄ学科はＡ学科やＢ学科より不安が高く、Ｃ学科はＢ学科よりも不安が高いことが示された。

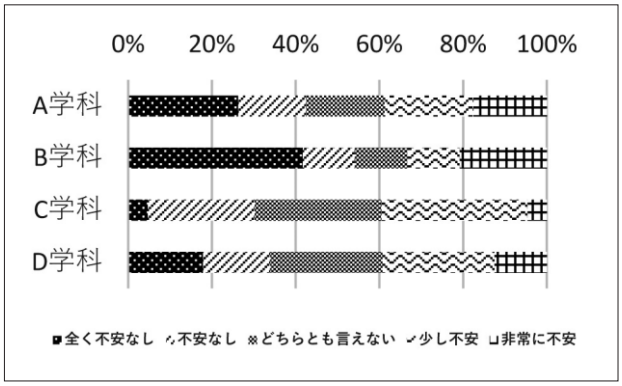


図２－１　平成29年度の回答分布

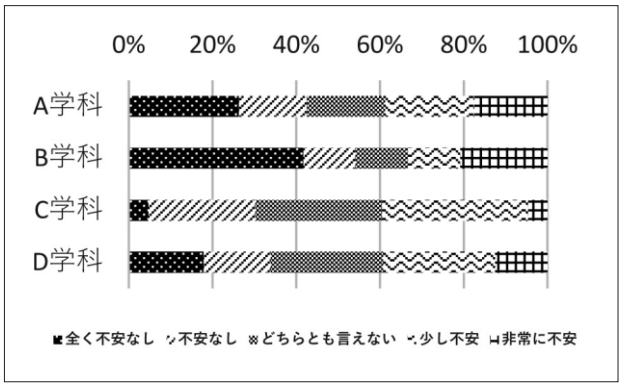


図２－２　平成30年度の回答分布

表３　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*
A	2.4	1.3	2.7	1.4	2.5	1.4
B	2.1	1.3	2.3	1.4	2.2	1.4
C	2.7	1.1	2.6	1.1	2.7	1.1
D	2.7	1.3	3.1	1.2	2.9	1.3
合計	2.5	1.3	2.7	1.4	2.6	1.3

c．オープンキャンパスに参加しましたか？

オープンキャンパスにどのように参加したか、あるいはしなかったかを尋ねた結果の回答分布を、図３－１と図３－２に示す。

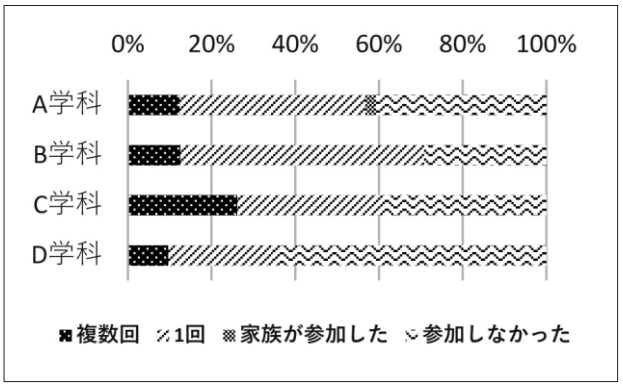


図３－１　平成29年度の回答分布

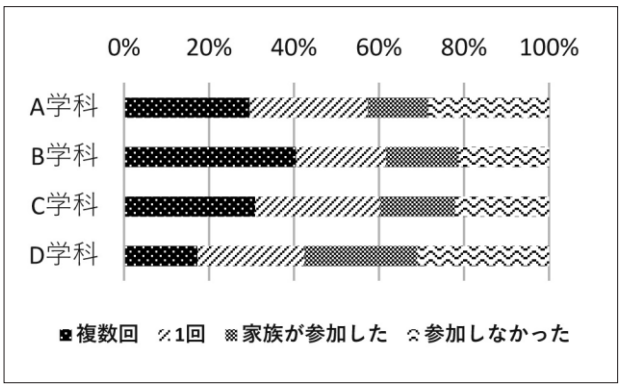


図３－２　平成30年度の回答分布

この回答結果をもとに、無回答を除いて、選択肢に対する回答比率について学科毎に χ^2 検定による年度の比較を行った。その結果は次の通りである。

Ａ学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いが示された（$\chi^2(3, N=369)=45.00$, $p<.01$）。残差分析の結果、30年度において「複数回参加した」や「自分ではなく家族が参加した」割合は有意に多く、「１回参加した」割合や「参加しなかった」割合が有意に少ないことが示された（$p<.05$）。

Ｂ学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統

計的に有意な違いが示された（$\chi^2(3, N=105)=21.74$, $p<.01$）。残差分析の結果、30年度において「複数回参加した」や「自分ではなく家族が参加した」割合は有意に多く、１回参加した割合が有意に少ないことが示された（$p<.05$）。

C学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いが示された（$\chi^2(3, N=150)=16.71$, $p<.01$）。残差分析の結果、30年度において「自分ではなく家族が参加した割合」は有意に多く、「参加しなかった」割合が有意に少ないことが示された（$p<.05$）。

D学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いが示された（$\chi^2(3, N=193)=39.01$, $p<.01$）。残差分析の結果、30年度において「自分ではなく家族が参加した」割合は有意に多く、「参加しなかった」割合が有意に少ないことが示された（$p<.05$）。

d．本学への進学は希望通りですか？

本学への進学は希望通りだったのかを尋ねたものであるが、その結果の回答分布を、図４－１と図４－２に示している。

この結果をもとに、無効回答を除き、選択肢に対する回答比率について学科毎にχ^2検定による年度の比較を行った。その結果は、次の通りである。

A学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いが示された（$\chi^2(4, N=381)=9.49$, $p<.05$）。残差分析の結果、「第一希望」とした割合は、30年度において有意に少ないことが示された（$p<.05$）。

B学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いはなかった（$\chi^2(4, N=108)=4.54$, $p=.34$）。

C学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いはなかった（$\chi^2(4, N=151)=5.35$, $p=.25$）。

D学科　年度ごとのそれぞれの回答の比率には統計的に有意な違いが示された（$\chi^2(4, N=195)=14.90$, $p<.01$）。残差分析の結果、30年度において「第一希望」とした割合は、有意に少なく、「第３希望」や「希望しなかったけど・・・」が有意に多いことが示された（$p<.05$）。

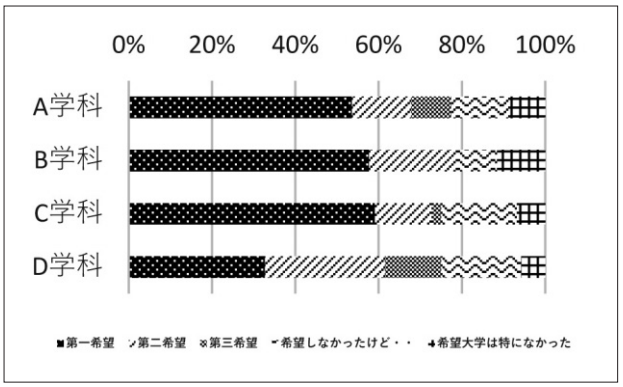


図４－１　平成29年度の回答分布

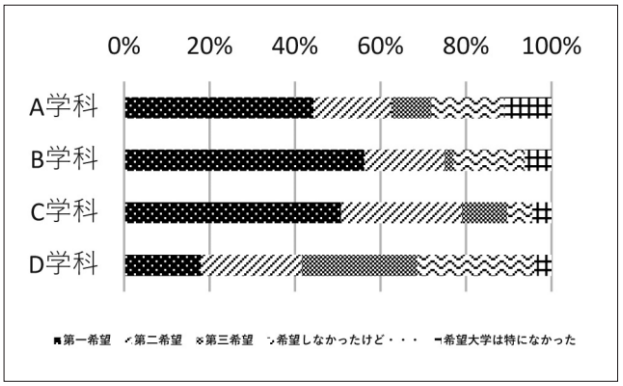


図４－２　平成30年度の回答分布

e．新入生対象の全学オリエンテーションは、よくわかりましたか？

新入生対象の全学オリエンテーションの理解度を尋ねたものであるが、その結果の回答分布を、図５－１と図５－２に示した。

a.と同様な手法を用いて、各学科の平均値を求め、分散分析を行った各学科の年度毎の平均値（$\overline{X}$）と標準偏差（SD）については、表４として示している。

これについて分散分析を行った結果、平成29年度が平成30年度比べてわかった度合いが有意に高いことが示された（$F(1,828)=23.66$, $p<.001$）。また、学科間でも有意な差がみられ（$F(3,828)=6.67$, $p<.001$）、Tukey法による多重比較を行ったところ、Ｄ学科はＡ学科に比べてわかった度合いが高いことが示された（$p<.05$）。

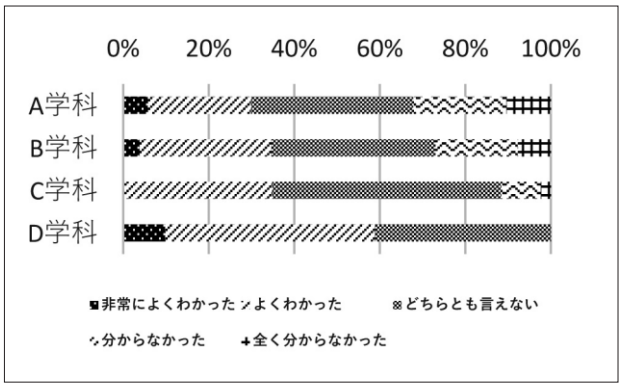


図５－１　平成29年度の回答分布

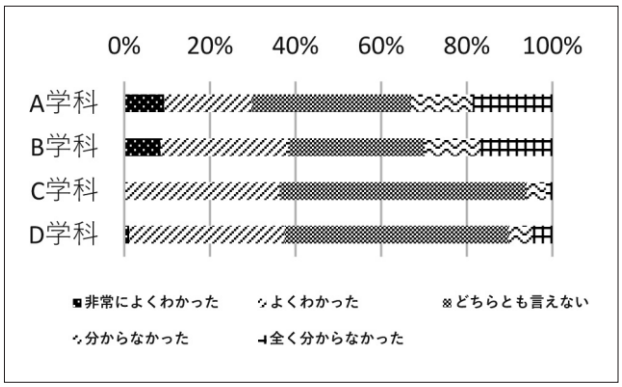


図５－２　平成30年度の回答分布

表４　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.3	1.0	2.9	1.2	3.1	1.1
B	3.5	1.0	3.3	1.2	3.3	1.1
C	3.5	0.8	3.3	0.6	3.4	0.7
D	3.7	0.8	3.2	0.7	3.5	0.8
合計	3.5	0.9	3.0	1.1	3.3	1.0

ｆ．新入生対象の学科別オリエンテーションは、よくわかりましたか？

新入生対象の学科別オリエンテーションの理解度を尋ねたものであるが、その結果を、図６－１と図６－２に示した。

ａ.と同様な手法を用いて、各学科の平均値を求め、分散分析を行った。各学科の年度毎の平均値（$\bar{X}$）と標準偏差（*SD*）については、表５として示している。

これについて分散分析を行った結果、平成29年度が平成30年度比べてわかった度合いが有意に高いことが示された（$F(1,812)=9.35$, $p<.01$）。また、学科間でも有意な差がみられ（$F(9,812)=11.73$, $p<.001$）、Tukey 法による多重比較を行ったところ、Ａ学科は他の３学科に比べてわかった度合いが低いことが示された（$p<.05$）。

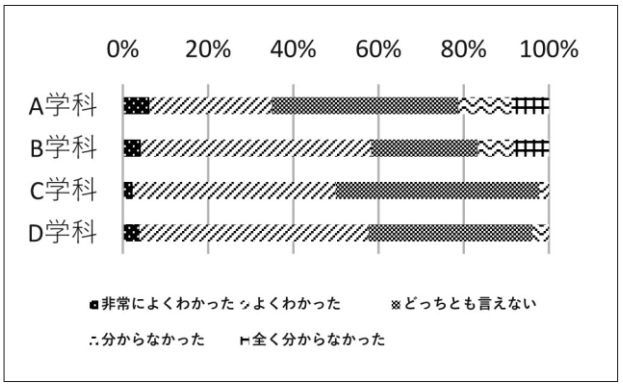


図６－１　平成29年度結果

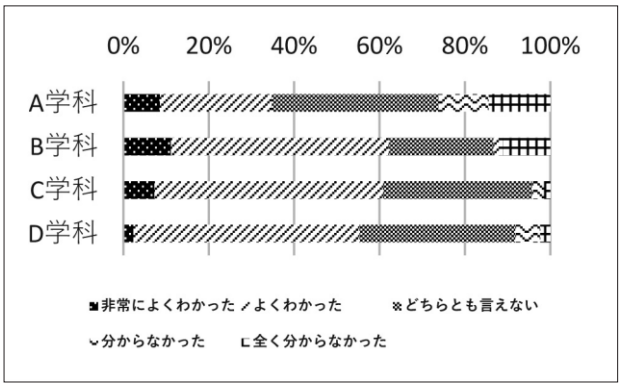


図６－２　平成30年度結果

表５　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.4	1.0	3.0	1.1	3.2	1.1
B	3.6	1.0	3.5	1.1	3.6	1.0
C	3.8	0.7	3.6	0.7	3.7	0.7
D	3.7	0.8	3.5	0.7	3.6	0.8
合計	3.6	0.9	3.3	1.0	3.4	1.0

アンケート調査結果

「４.クラス編成および調査方法」でも述べたように、「ホスピタリティ概論」は、大きく二つの形態をとっている。一つは、学科混合のクラス（班構成も学科混合）での授業であり、もう一つは各学科単位の授業である。前者の授業は、１回～10回であり、後者の授業は、11回～15回である。前述したホスピタリティ概論のねらいである「多様性理解力」や

「協働・課題解決力、そして、「コミュニケーション力」」に関しては、10回目までの授業で担当教員が意識して教育に当たってきた。そこで、10回目の授業時間の終了時に、受講生が授業内容をどのように受け取っているか、また、授業に対してどのような印象を持っているか等についてアンケート調査を行った。この調査の項目は、平成29年度の調査と同じである。全ての項目についての、平成29年度と30年度の結果は、参考資料３として巻末に掲げる。本論では、平成30年度の改善点に焦点を当てて、分析結果を述べることにする。各質問項目への回答に１～５（全くそう思わない：１、そう思わない：２、どちらともいえない：３、そう思う：４、非常にそう思う：５）の数値を与え、分析を行った。

調査対象者数は、表６の通りであるが、分析においては、所属先不明や無回答等については除外している。

表６　各年度における調査対象人数

学科	平成29年度	平成30年度
A	197	208
B	66	50
C	85	84
D	117	100
合計	465	442

a．プレゼンテーションの講義で、その意義や方法が分かった。

各年度における学科毎の回答の平均値（$\overline{X}$）と標準偏差（*SD*）を表７として示している。これについて分散分析を行った結果、平成29年度と30年度の全体の回答において、有意な差は見られなかったが（$F(1,861)=.55, p=.460$）、学科を比較すると、有意な差が見られた（$F(3,861)=4.25, p<.01$）。さらに、Tukey 法による多重比較の結果、D学科の平均評定値は、A学科のそれよりも高いことが明らかになった（$p<.05$）。また、開講年度と学科の交互作用は有意ではなかった（$F(3,861)=1.26, p=.287$）。

表７　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成29年度		平成30年度		合計	
	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*
A	4.0	0.9	3.9	0.9	3.9	0.9
B	4.0	0.9	3.9	1.0	3.9	1.0
C	4.0	0.9	4.2	0.7	4.1	0.8
D	4.2	0.9	4.2	0.9	4.2	0.9
合計	4.1	0.9	4.0	0.9	4.0	0.9

b．オープンキャンパスへの提案を考える授業では、自分の意見を言えた。

各年度の学科による回答の平均値（$\overline{X}$）と標準偏差（*SD*）を表８として示している。これについて分散分析を行った結果、開講年度による差が見られ（$F(1,861)=4.50, p<.05$）、平成30年度の平均評定値は平成29年度のそれより高いことが示された。学科を比較すると、有意な差が見られた（$F(3,861)=3.81, p<.01$）。Tukey 法による多重比較結果、C学科の平均評定値は、A学科のそれよりも高いことが明らかになった（$p<.05$）。また、開講年度と学科の交互作用は有意ではなかった（$F(3,861)=1.26, p=.288$）。

表８　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成29年度		平成30年度		合計	
	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*
A	3.7	1.0	3.7	1.1	3.7	1.0
B	3.9	1.2	4.0	1.1	3.9	1.2
C	3.8	0.8	4.2	0.8	4.0	0.8
D	3.9	1.1	4.0	1.0	4.0	1.0
合計	3.8	1.0	3.9	1.0	3.9	1.0

c．この授業で、他学科の人とおしゃべりする機会を持つ事ができた。

各年度における学科毎の回答の平均値（$\overline{X}$）と標準偏差（*SD*）を表９として示している。これについて分散分析を行った結果、開講年度による差が有意であり（$F(1,861)=11.47, p<.05$）、平成30年度の平均評定値は平成29年度のそれより高いことが明らかになった。また、開講年度と学科の交互作用は有意であった（$F(3,861)=6.10, p<.01$）。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、平成29年度においてC学科の平均評定値は、A学科のそれよりも有意に低いことが示された（$p<.05$）。学科別の開講年度の単純主効果検定の結果では、C学科において平成29年度より平成30年度の平均評定値が有意に高いことが示された（$p<.05$）。

表 9　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.9	3.7	1.0	3.7	1.1
B	3.6	1.1	3.9	1.1	3.6	1.3
C	3.4	1.0	4.0	1.0	3.6	1.2
D	3.6	1.0	3.8	1.0	3.6	1.2
合計	3.5	1.2	3.8	1.1	3.6	1.2

d．この授業で他学科の人の意見を聞くことができて有意義だった。

各年度における学科毎の回答の平均値（$\bar{X}$）と標準偏差（*SD*）を表10として示している。これについて分散分析を行った結果、開講年度による差は有意であり（$F(1,861)=9.99$, $p<.01$）、平成30年度の平均評定値は平成29年度のそれより高いことが明らかになった。また、開講年度と学科の交互作用は有意であった（$(3,861)=6.20$, $p<.01$）。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、平成29年度においてＣ学科の平均評定値は、Ａ学科のそれよりも有意に低いことが示された（$p<.05$）。学科別の開講年度の単純主効果検定の結果では、Ｃ学科において平成29年度より平成30年度の平均評定値が有意に高いことが示された（$p<.05$）。

表10　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.9	3.7	1.0	3.8	1.0
B	3.5	1.1	3.9	1.0	3.7	1.1
C	3.4	0.9	4.0	0.8	3.7	0.9
D	3.6	1.1	3.8	0.9	3.7	1.0
合計	3.7	1.0	3.8	1.0	3.7	1.0

e．自分としては、この授業に積極的に参加した。

各年度における学科毎の回答の平均値（$\bar{X}$）と標準偏差（*SD*）を表11として示している。これについて分散分析を行った結果、開講年度による差は有意であり（$F(1,861)=3.98$, $p<.05$）、平成30年度の平均評定値は平成29年度のそれより高いことが示された。学科の主効果も有意であり（$F(3,861)=3.22$, $p<.05$）、Tukey 法による多重比較の結果、Ｄ学科の平均評定値は、Ａ学科とＢ学科のそれよりも高いことが明らかになった（$p<.05$）。また、開講年度と学科の交互作用は有意ではなかった（$F(3,861)=2.00$, $p=.112$）。

表11　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.7	1.0	3.7	0.9	3.7	0.9
B	3.6	1.0	3.7	1.1	3.6	1.1
C	3.6	0.8	4.0	0.8	3.8	0.8
D	3.9	0.9	4.0	0.9	3.9	0.9
合計	3.7	0.9	3.8	0.9	3.8	0.9

f．ホスピタリティを理解する上で、この授業は今までのところ合格点を与えることができる。

各年度における学科毎の回答の平均値（$\bar{X}$）と標準偏差（*SD*）を表12として示している。これについて分散分析を行った結果、開講年度による差は有意であり（$F(1,861)=5.42$, $p<.05$）、平成30年度の平均評定値は平成29年度のそれより高いことが示された。学科の主効果は有意であり（$F(3,861)=3.28$, $p<.05$）、Turkey 法による多重比較の結果、Ｄ学科の平均評定値は、Ｂ学科とＣ学科のそれよりも高いことが明らかになった（$p<.05$）。また、開講年度と学科の交互作用は有意であった（$F(3,861)=6.34$, $p<.05$）。これについて開講年度別の学科の単純主効果の検定を行った結果、平成29年度においてＣ学科の平均評定値は、Ａ学科とＤ学科のそれよりも有意に低いことが、平成30年度ではＡ学科の平均評定値がＤ学科のそれよりも有意に低いことが示された（$p<.05$）。学科別の開講年度の単純主効果検定では、Ａ学科において平成30年度より平成29年度の平均評定値が有意に高く、Ｃ学科とＤ学科において平成29年度より平成30年度の平均評定値が有意に高いこと

表12　各学科の年度別の平均値と標準偏差

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	0.8	3.7	0.8	3.8	0.8
B	3.6	1.0	3.7	1.0	3.7	1.0
C	3.5	0.8	3.9	0.8	3.7	0.8
D	3.8	0.9	4.0	0.7	3.9	0.8
合計	3.7	0.9	3.8	0.8	3.8	0.8

が示された（$p<.05$）。

g．自由記述（ホスピタリティ概論を受講しての感想）

各年度における学科毎の自由記述の文字数をカウントした。各年度の学科毎の平均文字数（$\overline{X}$）と標準偏差（*SD*）は、表13として示している。

表13　自由記述の平均文字数

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*	$\overline{X}$	*SD*
A	41.0	22.8	60.3	34.6	51.3	31.2
B	37.5	20.0	65.4	39.1	49.6	33.0
C	55.0	34.1	88.8	40.0	72.0	40.0
D	47.8	23.2	67.7	39.6	57.4	33.8
合計	44.8	25.7	67.9	38.8	56.4	34.9

これについて分散分析を行った結果、開講年度の文字数には有意な差が見られた（$F(1,872)=109.80$, $p<.001$）。つまり、文字数は平成29年度より30年度が多いことが示された。また，学科の主効果が有意であり（$F(3,872)=18.03$, $p<.001$）、Tukey 法による多重比較を行った結果、学科においてはC学科の記述がそのほかの 3 学科より多く、D学科の記述はA学科のそれより多いことが示された。

h．テキストマイニングによる分析

得られた967件の自由記述回答のうち、回答に不備があった 6 名を除いた961件を対象に分析を行った。各学科の回答状況は、表14として示している。

表14　各年度における学科の記述状況（名）

学科	平成 29 年度		平成 30 年度	
	有り	無し	有り	無し
A	186	31	210	13
B	62	9	47	6
C	81	4	82	3
D	109	11	103	2
計	438	57	442	24

自由記述の分析に際して、樋口（2015）を参考にKH Coder（Ver.2.0）を使用した。「ホスピタリティ概論を受講しての感想」についての自由記述の分析を受講した年度別および学科ごとの年度別で行った。エクセルファイルの各行に 1 件ずつ入力された自由記述を読み込み、テキストファイルに変換後，自動的に語を取り出し、頻出語を抽出した。その際に，事前処理として、茶筌による複合語の検出を行い、抽出された複合語を強制抽出するように設定した。なお、集計単位は「段落」と「文」でそれぞれ作成した。

紙面の制約上、詳しい分析の結果は次回の報告にまわすが、全般的なまとめは次のようになる。ホスピタリティ概論を受講しての感想について年度別で自由記述の頻出語を算出した結果，両年度とも「ホスピタリティ」、「思う」、「人」、「話」が多く頻出していた。これらは，質問項目がホスピタリティ概論を受講しての感想だったため，その説明として「ホスピタリティ」や「思う」が多く使用されていたと考えられる。年度別で共通または共通しない頻出語を調べるために、共起ネットワークを作成した結果、平成29年度では「知れる」が多く頻出していたのに対し、平成30年度では，「交流」や「意見」、「話す」などが多く頻出していた。このことから、平成29年度では、知れたことに関する感想が多かったのに対して、平成30年度では交流や意見などに関する感想が多いことが示唆された。

5．考　　察

調査結果から様々なことを読み取ることができるが、本項では最初に、平成29年度から30年度にかけての入学生像の変化について、クリッカーの調査から読み解いていく。次いで、平成29年度の調査結果等を踏まえての平成30年度の改善点の成果及び 2 年目のホスピタリティ概論の充実度について、アンケート結果から考察する。

まず、入学生像の変化についてであるが、クリッカー結果のａやｂに見られるように、心身に何らかの不安を抱えての入学生は、平成29年度も30年度も半数以上になる。そして、平成30年度の方がその不安を感じている学生の割合が多くなっている。特にD学科は他学科に比べて、その割合が高くなっていることが分かる。これは、入学当初ということも考慮しなければならないが、学生の不安解消への配慮がますます重視されなければならないことを示して

いる。

また、本学への進学に関しては、結果ｄに示されているように、本学への進学が第一希望でない学生がＡ学科とＤ学科で増えている。このことは、進学に関して、何らかの挫折を味わった学生が入学してきていることに対して、より一層の配慮が必要になっていることを示している。また、オープンキャンパスへの参加状況を尋ねた結果は、ｃに示されているが、複数回参加した学生が有意に多くなっているのが、Ａ学科とＢ学科であり、自分ではなく家族が参加したとの回答が、全ての学科で有意に増加している。これは、オープンキャンパスで自分が納得して入学した学生と家族のすすめで入学した学生の増加は、いわば積極的な進学組と消極的な進学組が存在していることになり、従来の入学生像に変化が生じていることを示している。この状況を裏付ける一つとして、全学および学科別のオリエンテーションの理解度を尋ねたｅおよびｆの結果において、全学および学科共に平成30年度のほうが低下していることを挙げることができる。つまり、オリエンテーションで理解することが困難になっている学生が、平成30年度に増加しているのである。オリエンテーションは入学時の密なスケジュールを縫って行われるもので、例年同じような内容が伝えられている。これが理解しにくくなっていることも、学生の質的な変化を物語るのではなかろうか。

続いて、今年度の改善点の成果について考察する。平成29年度は、ホスピタリティ概論の開設１年目であり、他大学等での実践を参考に編成され[2)]、実施された。従って、長崎国際大学の建学の理念の理解及び社会での有用性、そして、愛校心の芽生えを主な目的とし、全教職員でその学習をサポートする体制をとった。特に、後者については、教職協働の意義が強調されていることにも触発された[3), 4)]。

平成29年度の実践に対して、受講生を対象とした授業の成果や改善点の探索を目的とした調査を行った。その結果、各質問項目について受講生からは概ね肯定的な意見が返ってきたが、割り当てられた教室では学修活動が制限されるとの指摘が多く見られた。これは当初から予想される回答でもあった。それは、全学の１年生を対象に行う授業のためには、机等の移動が可能で大人数を収容できる大教室が必要であるが、そのような教室ないため、固定式の机が並ぶ大教室での実践になったからである。平成30年度の実施にあたっては、この改善の検討を行った。この問題を解決するために、クラスを小さくして幾つかの時間帯での実施を考えたが、多くの科目が並ぶ現在の時間割から、その検討案に叶う時間帯や教室を見つけることができなかった。

一方で、平成29年度の担当教員等からは、学生の主体的な活動をさらに活発にしなければ目的の達成は不可能ではないかとの意見が寄せられた。加えて、初めて授業担当する事務職員からは、本来の業務がおろそかになる、あるいは、学生の活動支援の方法に迷うとの意見も寄せられた。

改善案の検討の結果、教室を変更することをあきらめ、上級生の学生スタッフを各班に採用し、受講生の学修活動支援にあたらせることにした。また、授業担当の事務職員を各課割当制から、「やってみたい」との意思を示した事務職員との協働体制に組み替えた。

これらの改善は、アンケート結果に示されている受講生の活動の変化となって表れている。つまり、結果ｂの表２に示されているように、「オープンキャンパスへの提案を考える授業では、自分の意見を言えた」の質問項目に肯定的に答えた受講生の割合が、平成29年度よりも平成30年度の方が有意に高くなっている。

また、結果ｃの表３に示されているように、「この授業で、他学科の人とおしゃべりする機会を持つ事ができた」の質問項目に、肯定的に答えた受講生の割合が、平成29年度よりも平成30年度の方が、有意に高くなっている。さらに、結果ｄの表４に示されているように、「この授業で他学科の人の意見を聞くことができて有意義だった」との質問項目に、肯定的な回答を寄せた受講生の割合が、平成29年度よりも平成30年度の方が有意に高くなっている。

これらの結果は、平成29年度よりも平成30年度の方が、班の構成メンバーと活発にコミュニケーションを行ない、それを肯定的に捉えることができるようになったことを示している。

それを裏打ちするのが、結果ｅの表５であり、結

果ｆの表６である。結果ｅでは、「自分としては、この授業に積極的に参加した」の質問項目に、肯定的な回答を寄せる受講生が平成30年度の方が多くなっていることを示している。また、結果ｆでは、「この授業は、今までのところ合格点を与えることができる」との質問項目に、平成30年度の方が有意に高い肯定的な回答を寄せている。

これらのことから、改善策は有効に働いたと判断する事ができる。

一方、「ホスピタリティ概論」の充実に関してはどのように考えればいいのだろうか。前述の結果ｅやｆの分析から、受講生が「ホスピタリティ概論」の授業の価値を認め、授業への主体的な参加を加速していると判断することができる。

これを裏付けるのは、結果ｇとｈの結果である。ｇでは、受講生の自由記述欄の文字数を分析したものであるが、各学科ともに有意に文字数が増加している。これは、受講生が前向きに授業に参加していることを示している。それは、著者の先行研究報告で明らかにしているが、授業中のアンケート調査の自由記述欄に記載されている文字数は、それぞれの受講生の出席状況や成績との相関がある[5)]。つまり、授業に出席をし、積極的に取り組んでいる受講生ほど、自由記述欄の文字数が多いのである。

結果ｈは、その自由記述を使ってのテキストマイニング手法での分析である。前述したように、ホスピタリティの後の出現頻度は高く、ホスピタリティを高く意識していることが分かる。また、平成29年度は、「知れる」が多かったのに対して、「交流」や「意見」そして、「思う」が多くなっている。これは、話を聞いて知識を持つ段階から班内での交流や意見交換へと活動的になっていることを暗示するのかもしれない。

これらから、平成30年度に向けた改善策は一定の効果を上げたと判断する事ができる。ただ、学科別に回答結果を分析すると、参考資料３に示すように、昨年度よりも明らかに充実している傾向が読み取れる学科（Ｃ学科）もあれば、逆にそれが読み取れない学科（Ａ学科）もある。

この原因に関しては、さらに詳細な分析が必要となるが、一部の担当教員からは、担当教員と学生スタッフの事前研修に力を入れるべきであるとの意見が寄せられている。ホスピタリティ概論の担当教員の各学科でローテーション決定方式も含めて今後の課題にしたい。また、学生スタッフに関しては、担当教員の選択となっているが、教育基盤センター等で事前研修プログラムを組み、それを修了した学生から選ぶ方式も必要ではなかろうか。

６．おわりに

開講して２年になる「ホスピタリティ概論」に関する調査結果を述べ、授業改善に向けた考察を行った。考察の部分でも述べたように、改善策が功を奏したことが認められる半面、学科毎の分析では効果が見られる学科とそうでない学科が見られ、今後の検討課題も明らかになった。また、入学生の質的な変化の一端も明らかになり、その対処への配慮が必要であることは提案した。

もちろん、２年間という短期間での分析は、不安定な要因も多く存在している。今後、さらに調査を続け、分析をしては改善を加えることを重ねていかなければならないと考えている。

参考・引用文献

１）藤原俊幸他（2018）：教職協働で行う初年次教育―ホスピタリティ概論の実践と課題―，長崎国際大学教育基盤センター紀要第１巻，pp.55-80，長崎国際大学教育基盤センター
２）濱名　篤・川嶋太津夫編（2006）：初年次教育，pp.3-5，丸善株式会社
３）慈道祐治（2013）：教職協働の原点と課題，立命館高等教育研究14号，pp.29-37，立命館大学
４）大場　淳（2014）：大学職員論・教職協働から見たカリキュラム・マネージメント，大学教育学会紀要第36巻１号，pp.53-58，大学教育学会
５）橋本健夫・川越明日香（2017）：授業改善のためのConnected Data Systemの構築に向けた基礎研究，長崎国際大学論叢第17巻，pp.39-50，長崎国際大学研究センター

「参考資料 1」

授業科目(ナンバリング)	**ホスピタリティ概論（AA103）**			担当教員	安部直樹・中島憲一郎・木村勝彦 橋本健夫・井上英也・原哲弘・乙須翼 森尾真之・野田健・ヴィラーグヴィクトル 藤井俊輔・小田和人・藤原俊幸 田中啓太郎・藤井祐樹		
展開方法	講義	単位数	2 単位	開講年次・時期	1 年・前期	必修・選択	必修
授 業 の ね ら い							アクティブラーニングの 類 型
本学は、「人間尊重」を基本理念に、「ホスピタリティの探求、実現」を教育・研究の基礎としています。また、ホスピタリティを構成する能力を身につけ活用できることが、本学の学位授与の方針となっています。本講座は、本学でのあらゆる学びの基本となるホスピタリティの意味を理解し、実践的に体現していくことができるようになることをねらいとします。							④⑤⑥ ⑦⑫

ホスピタリティを構成する能力	学 生 の 授 業 に お け る 到 達 目 標	評価手段・方法	評価比率
専門力	ホスピタリティの具体的なあり方を自らの専攻分野に関連づけて説明することができる。	レポート	15%
情報収集、分析力	ホスピタリティの基本的な精神とそのさまざまな表現について情報を収集し、分析することができる。	レポート	5%
コミュニケーション力	ホスピタリティの精神を社会生活の中で実践し円滑な人間関係を築くために、周囲の人達と積極的なコミュニケーションを図ることができる。	授業中の発表や授業ノート	30%
協働・課題解決力	与えられた課題を自らのものとして捉え、解決を試みることができる。	課題の解決策	20%
多様性理解力	異分野を専攻する者で構成するグループ活動等において、多くの価値観を認め、協力できる。	授業中の発表や授業ノート	30%
出　　席		受験要件	
合　　計		100%	

評価基準及び評価手段・方法の補足説明

授業中の参加態度、発表など、授業での積極性、協調性、主体性、などを観察法で評価する。また、講義終了ごとに提出を求める「授業ノート」により理解度を確認する。加えて適宜課されるレポートの内容と併せて、総合的に評価する。授業、レポートにおける質問、コメントなどへのフィードバックは都度おこなう。

授 業 の 概 要

本授業は、テーマ、内容に応じて、理事長、学長、副学長をはじめとする本学教員および社会で活躍する本学の卒業生ならびに外部講師の講義により、本学の学びの核となる“ホスピタリティ”の多面的な理解を目指す。また、授業内容により全体、学部・学科混成、学科別にクラスを編成し、同学年の多くの学生と学び、討議し、実践する機会を提供する。この授業の標準的な 1 コマあたりの授業外学修時間は、180 分とする。

教 科 書 ・ 参 考 書

教科書：特に指定しない　　参考書：適宜指示する　　指定図書：「本物の大人論」外山滋比古(著) 海竜社

授業外における学修及び学生に期待すること

・専攻の異なる他学科の学生および留学生と積極的に交流することで、自分と異なることへの受容性を高め、幅広い視野を養うこと。
・集団における自分の役割を認識し、自分自身のホスピタリティに基づく行動が全体に与えるプラスの影響について考える習慣を身につけること。
・授業で学んだことを直ちに実践してみること。

「参考資料 1」

回	テ　ー　マ	授　業　の　内　容	予習・復習
1	オリエンテーション	シラバスの説明、担当教員及び事務職員の紹介、班編成、班ごとの自己紹介、授業ノート（manaba レポート)の入力方法の説明などを実施する。	シラバスを読んでおく
2	「建学の理念」とホスピタリティ	九州文化学園創立の経緯やその発展の歴史を紹介する。次いで、地域の大学として開設された本学の理念である「人間尊重」や「ホスピタリティ」を茶道を例にして具体的に述べ、自校愛の芽生えを図る。	（予）九州文化学園のホームページを見ておく （復）授業ノート提出
3	長崎国際大学が育成する学士像	大学の役割を説明するとともに、学生一人一人が将来像を描けるように、長崎国際大学が育てる人物像をディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーを活用して具体的に述べる。さらに、安心して学修に励むことができるような体制を、教員や職員が一体となって構築していることを紹介し、主体的な学修への一歩を促す。	（予）ディプロマ・ポリシーを見ておく （復）授業ノート提出
4	ホスピタリティの起源と文化	世界史および日本史におけるホスピタリティの起源と変遷を理解し、現代社会の課題を明らかにする。	（予）ホスピタリティの意味を調べておく （復）授業ノート提出
5	プレゼンテーションの重要性	限られた時間の中で、情報や主張を自分の言葉で聴衆に伝えることを目的とするプレゼンテーションの重要性について専門家から学ぶ。	（予）プレゼンテーションの意味を調べておく （復）授業ノート提出
6	オープン・キャンパス・プロジェクト①	「ホスピタリティに溢れる大学」をテーマにオープン・キャンパスを企画し、プレゼンテーションを作成する。	（予）オープン・キャンパスの体験を振返っておく （復）プレゼンテーションを完成させる
7	オープン・キャンパス・プロジェクト②	グループごとにプレゼンテーションを発表	（予）プレゼンテーションの準備 （復）授業ノート提出
8	事務職員のキャリアとホスピタリティ	本学の事務職員の仕事について理解し、職員の経歴をもとに、仕事とホスピタリティの関係を考察する。	（予）キャリアの意味を調べておく （復）授業ノート提出
9	国際化とホスピタリティ	グローバル化する社会の多様な文化の中におけるコミュニケーションのあり方を考察する。	（予）他言語を学ぶことの意義を考えておく （復）授業ノート提出
10	ホスピタリティ度の自己認識	自分自身が持つホスピタリティの度合いを認識するとともに、ホスピタリティを実践するための行動目標を設定する。	（予）ホスピタリティ体験を考えておく （復）行動目標の完成
11		各専攻分野に求められるホスピタリティ	
12		学科別の課題とホスピタリティ①	
13		学科別の課題とホスピタリティ②	
14		学科別の課題とホスピタリティ③	
15		学科別のまとめ及びレポート提出	

「参考資料 1」

国際観光学科

回	テ　ー　マ	授　業　の　内　容	予習・復習
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	国際観光学科に求められるホスピタリティ	国際観光学科での学びにおけるホスピタリティの重要性を理解し、特に本学科の学生に求められる多様性理解力について考察する。	（予）観光の必要性を考えておく。 （復）授業ノート提出
12	仕事におけるホスピタリティとは	ホテル会社からの外部講師による講義を通じて、ホスピタリティと仕事の結びつきを学ぶ。	（予）ホテルのサービスについて考えておく。 （復）授業ノート提出
13	組織運営とホスピタリティ	ホスピタリティを核とした組織における、社員のモチベーションについて、ディズニーランド、スターバックス、ザ・リッツカールトンなどの事例から学ぶ。	（予）ディズニーランドについて思い浮かぶ言葉を５つ考える。 （復）授業ノート提出
14	長崎国際大学での学びと社会	社会で活躍する国際観光学科の卒業生を招き、大学の学びと仕事の結びつきを共に考える。	（予）大学生活におけるホスピタリティの意義をまとめておく。 （復）授業ノート提出
15	「ホスピタリティ概論」を受講して	「ホスピタリティ概論」での成長を診断するとともに、授業の改善点を検討し、まとめる。	（予）授業ノートをまとめておく。 （復）授業の改善点の完成

「参考資料 1」

社会福祉学科

回	テ　ー　マ	授　業　の　内　容	予習・復習
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	社会福祉学科のホスピタリティ	社会福祉の歴史を概観しながら、対人援助及び地域援助に求められる多様性の尊重等の諸原理とホスピタリティとの関係性について学ぶ。（学部長・学科長）	（予）学部長・学科長に質問したいことを列挙する。 （復）授業ノート提出。
12	福祉の仕事におけるホスピタリティ①	現場で活躍するソーシャルワーカーの実践事例を踏まえたホスピタリティの考察から、その必要性について理解を深める。（ソーシャルワーカー）	（予）ＳＷに質問したいことを列挙する。 （復）授業ノート提出。
13	福祉の仕事におけるホスピタリティ②	社会福祉学科卒業生が本学と現場で学んだホスピタリティや専門知識等を社会福祉実践にどう結び付けているかを知り、学修する意味を理解する。（卒業生）	（予）卒業生に質問したいことを列挙する。 （復）授業ノート提出。
14	「ホスピタリティ概論」全体の振り返り	これまで学修してきた授業を振り返り、ソーシャルワーカーがホスピタリティをどう受けとめ、研鑽すべきかをグループで検討する。	（予）これまでの授業ノートや配布物を整理する。 （復）授業ノート提出。
15	「ホスピタリティ」論述	ホスピタリティの意味についてどのように理解し、今後どのように実践的に体現していきたいかを論述する。	（予）第 15 回授業内容に対する自分自身の考えをまとめる。

「参考資料 1」

健康栄養学科

回	テ　ー　マ	授　業　の　内　容	予習・復習
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	健康栄養学科に求められるホスピタリティ	「食と医学を基本とした栄養学」を修得し、広く社会に貢献していくために、健康栄養学科での学びにおけるホスピタリティの重要性を理解する。	これまでの授業内容をまとめておく。
12	ホスピタリティと仕事　1	臨床栄養・・・医療分野 ①栄養ケア・マネジメントの実践を通して ②傷病者の栄養計画から具体的なプラン展開を通して ③チーム医療に重要なコミュニケーション力を通して	医師、看護師、薬剤師、管理栄養士のチーム医療について調べておく。
13	ホスピタリティと仕事　2	福祉施設・・・高齢絵福祉施設・保育所 ①栄養管理方法の理解を通して ②栄養問題について実践的な提案を通して ③介護保険制度や保育所給食のガイドラインの理解を通して	福祉施設の現状について調べておく。
14	ホスピタリティと仕事　3	委託給食施設・・・委託会社、派遣会社 ①受託先・派遣先との契約を通して ②多用な業務を通して ③受託先、委託先とのチームワークを通して	委託給食施設について調べておく。
15	「ホスピタリティ概論」を受講して	「ホスピタリティ概論」での成長を診断するとともに、授業の改善点を検討し、まとめる。	（予）授業ノートをまとめておく。 （復）授業の改善点の完成

「参考資料 1」

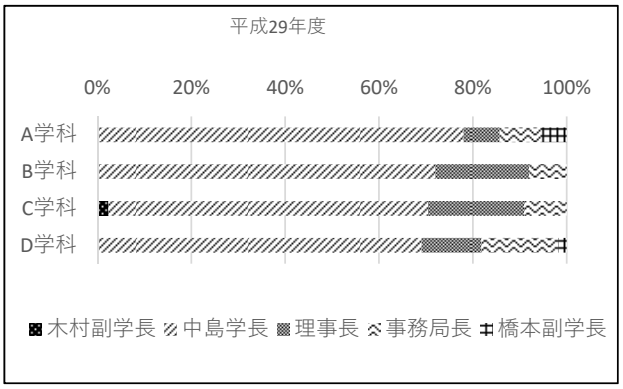
薬学科

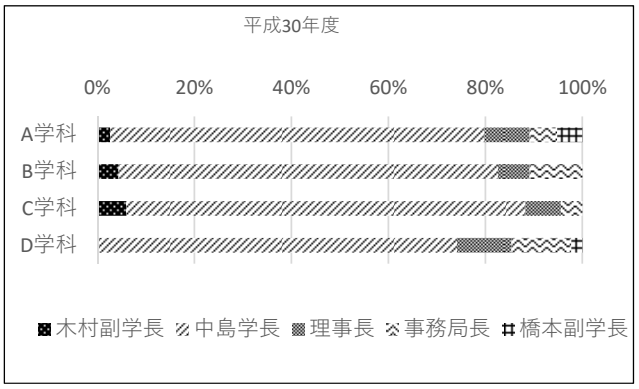
回	テ　ー　マ	授　業　の　内　容	予習・復習
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11	薬学科に求められる ホスピタリティ	薬学部学生が卒業時に必要とされる資質、すなわち薬剤師としての基本的資質が 10 項目挙げられている。それらの資質の修得は、患者・生活者本位の視点を醸成する基盤として位置付けられる。本講義は、患者に寄り添う薬剤師としてのホスピタリティについて考えることを狙いとする。	薬剤師としての基本的資質である 10 項目の内容について調べておく。
12	仕事とホスピタリティ	仕事に必要であるホスピタリティを本学 OB（病院・薬局、行政等）、外部講師から講演・談話形式で学ぶ	病院・薬局での薬剤師の仕事について調べておく。
13	ホスピタリティのための 心理学 1	患者・生活者、他の職種との対話を通じて相手の心理、立場、環境を理解し、信頼関係を構築するために役立つ能力を身につける。 1. 自身の行動と他者の行動が，どのような感情・情動で決定するのか体験的に理解する。 2. 意思、情報の伝達に必要なコミュニケーションのあり方について学習する。 3. 対人関係に影響を及ぼす心理的要因についてさまざまな場面を疑似体験することで体験的に理解する。 4. 病歴や処方箋から患者の心理状態について推測する力を養しなう。 5. 自分や他者の態度によって影響を受ける自身の心理や他者心理について理解する。（態度）	チーム医療について調べておく。
14	ホスピタリティのための 心理学 2	6. 他者にとってバッドニュースを適切な手段により伝えることができる。 7. 自分の考えや感情を相手に不快な思いをさせずに伝えることができる。（技能・態度） 8. 他者の意見を尊重し、協力してよりよい解決法を見出すことができる。（知識・技能・態度） 9. 患者や家族、周囲の人々の心身に及ぼす病気やケアの影響についての予測について適切に説明できる。 10. 患者・家族・生活者の心身の状態や多様な価値観について想像し，配慮できるようになる。（態度）	12 回目・13 回目の内容についてノートにまとめ、自分の意見を述べることができるようにしておく。
15	「ホスピタリティ概論」を受講して	「ホスピタリティ概論」での成長を診断するとともに、授業の改善点を検討し、まとめる。	（予）授業ノートをまとめておく。 （復）授業の改善点の完成

「参考資料 2」

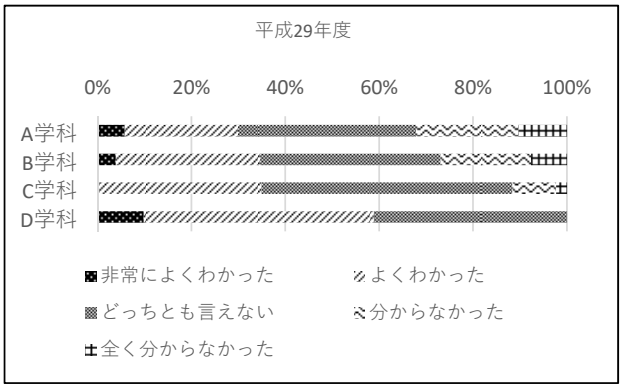
クリッカー調査質問項目別結果（平成 30 年度と平成 29 年度）

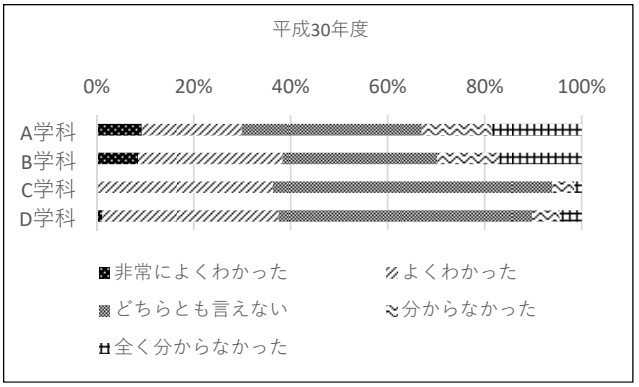
1.　ご入学、おめでとうございます。さて、本学の学長は何番でしょう？



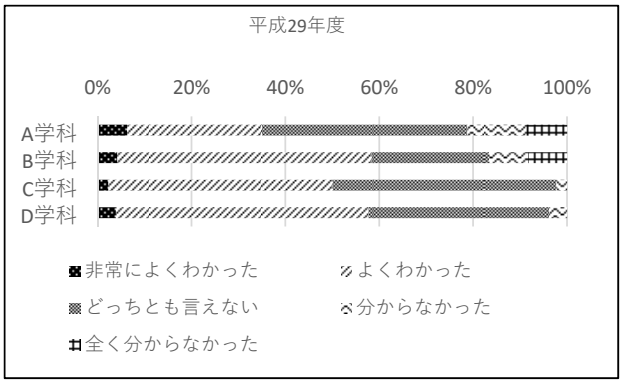


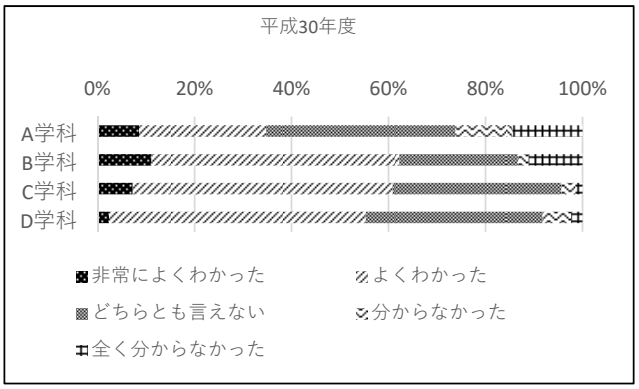
2.　新入生対象の全学オリエンテーションは、よくわかりましたか？



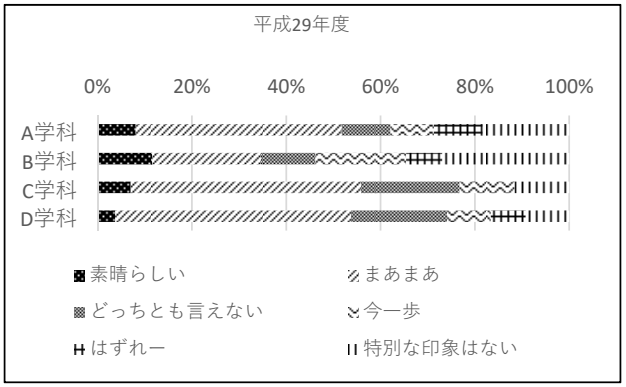


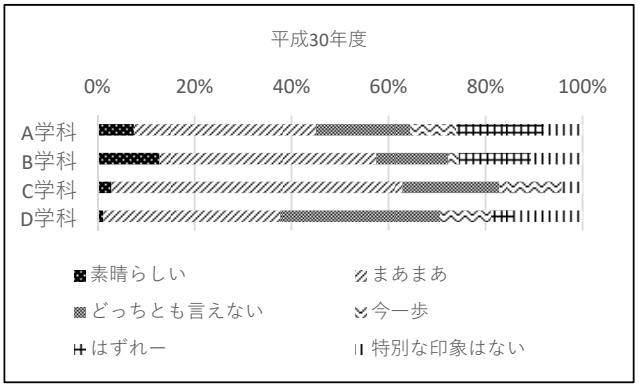
3.　新入生対象の学科別オリエンテーションは、よくわかりましたか？





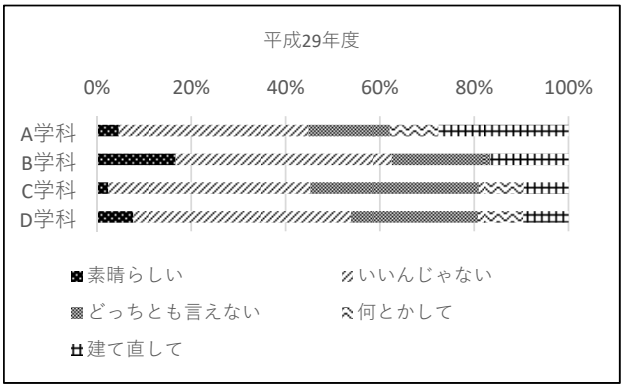
4.　入学して 1 週間(1 ヶ月)の本学の総合的な印象はいかがですか？

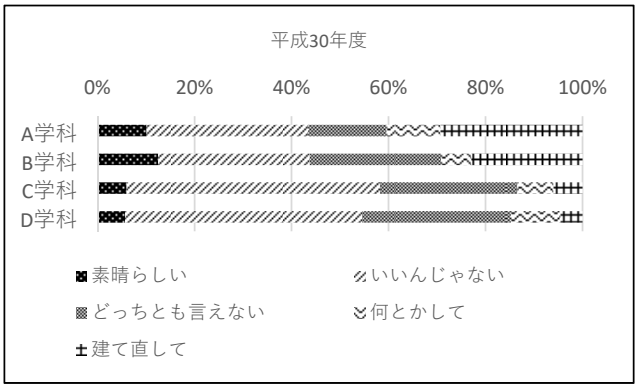




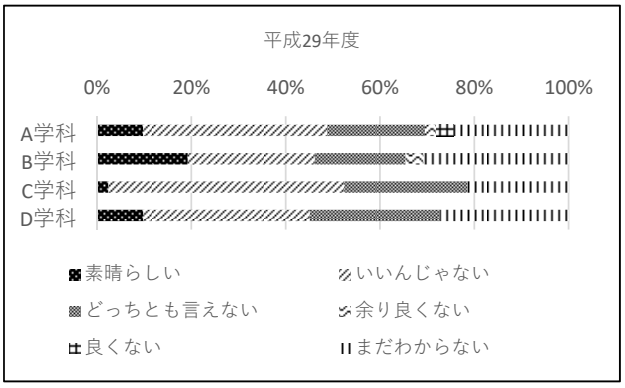
「参考資料 2」

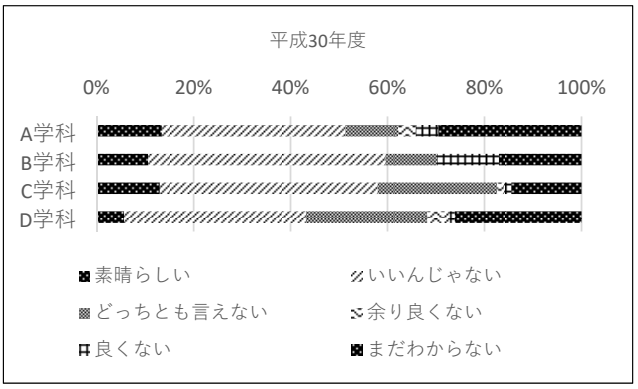
5.　本学の建物に関しての印象は？本学の建物に関しての印象は？



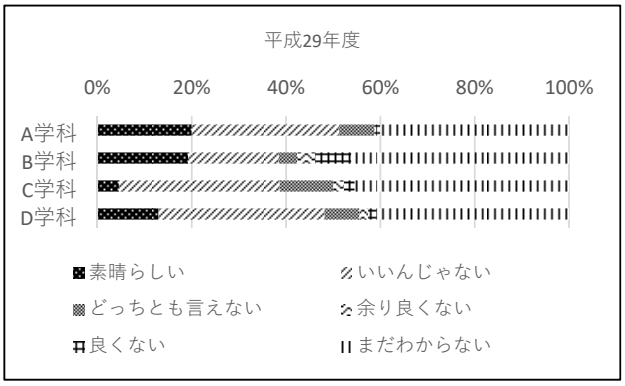


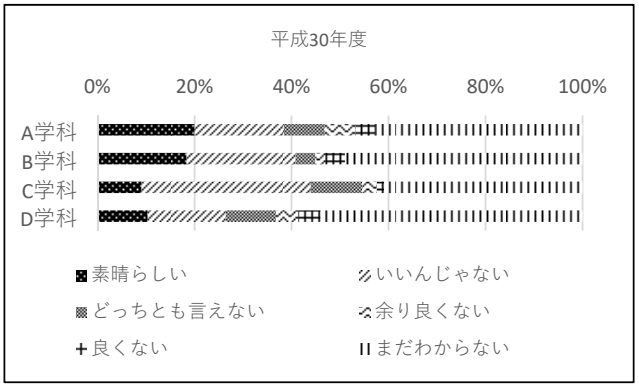
6.　本学の先生方の印象は？



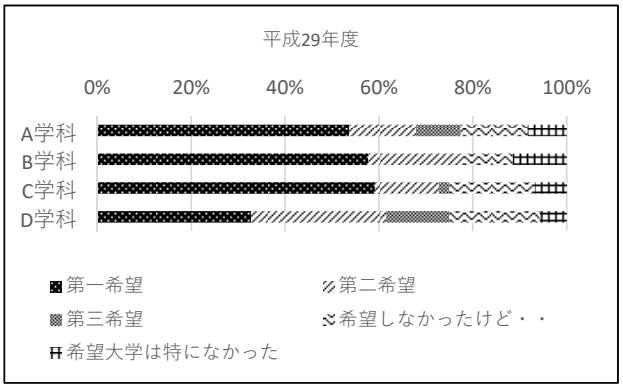


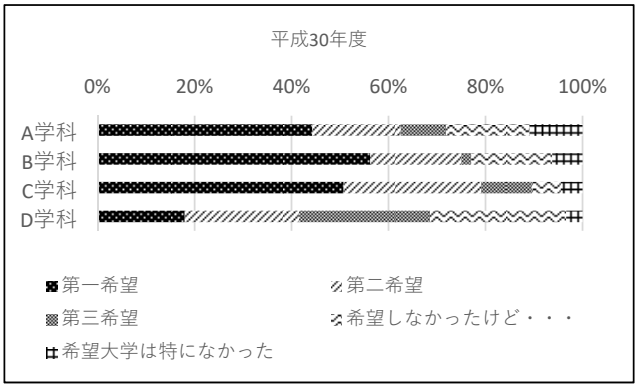
7.　本学の事務の皆さんに対する印象は？





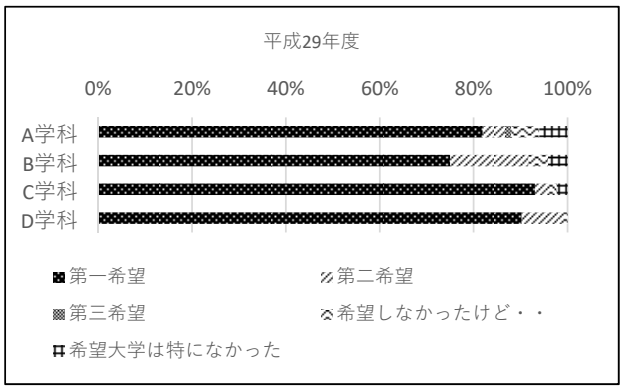
8.　本学への進学は希望通りですか？

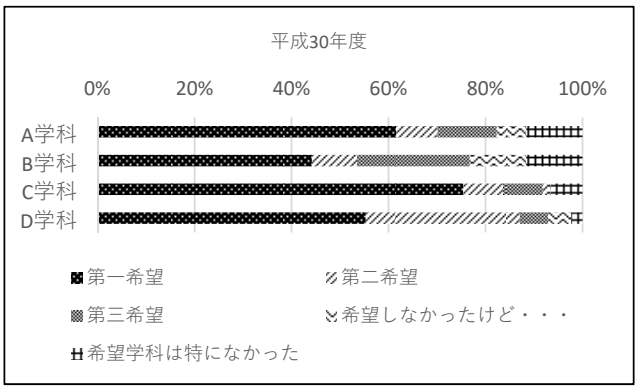




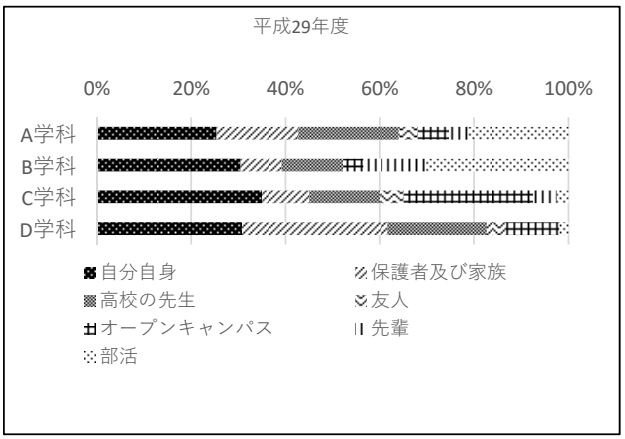
「参考資料 2」

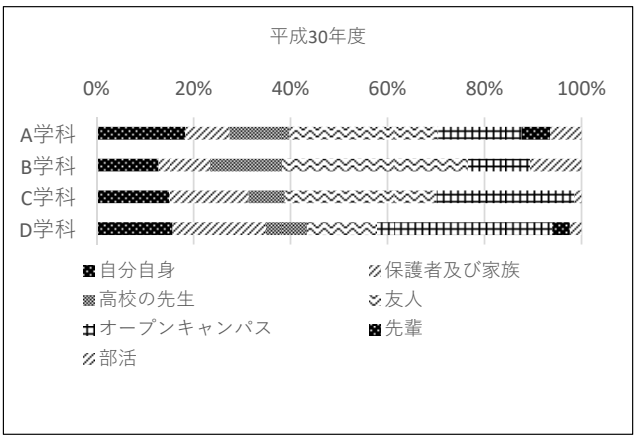
9.　進学した学科は希望通りですか？



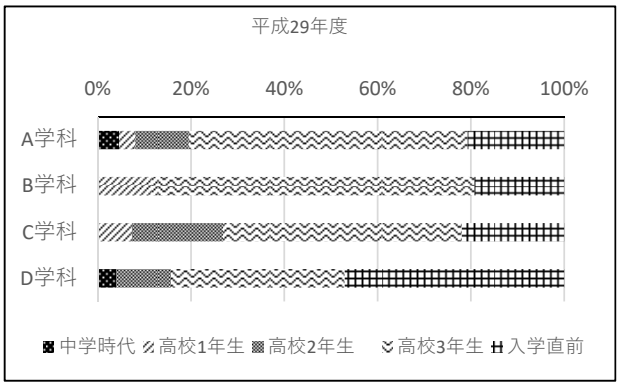


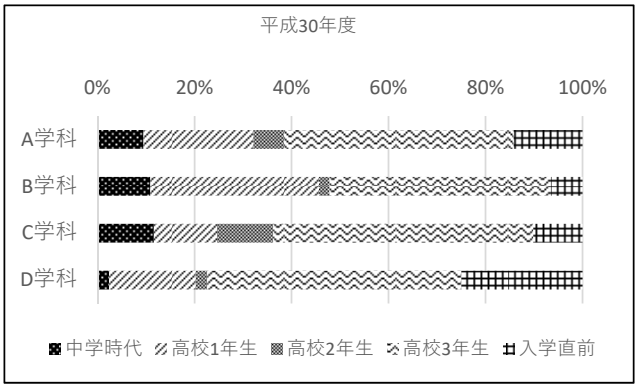
10.　本学（或いは学科）への進学に最も影響を与えた人（機会）は？



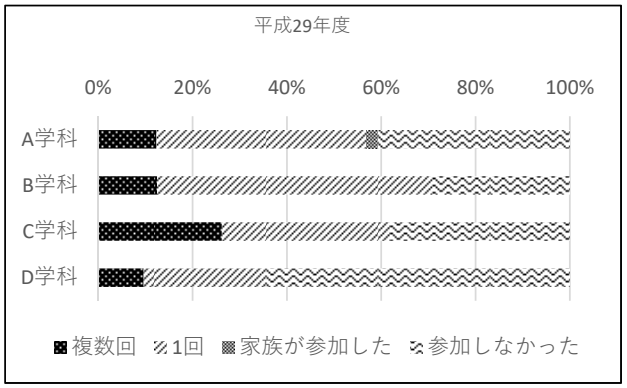


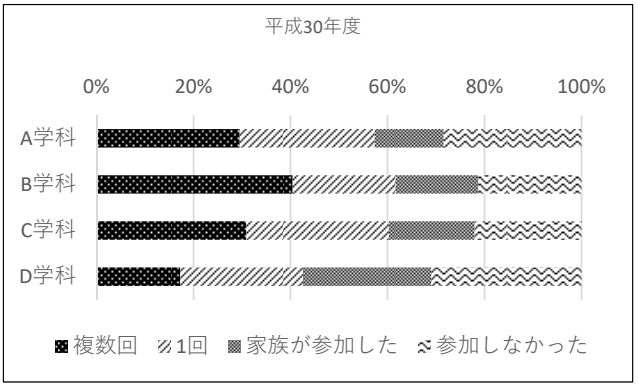
11.　いつ頃本学への進学を決めましたか？





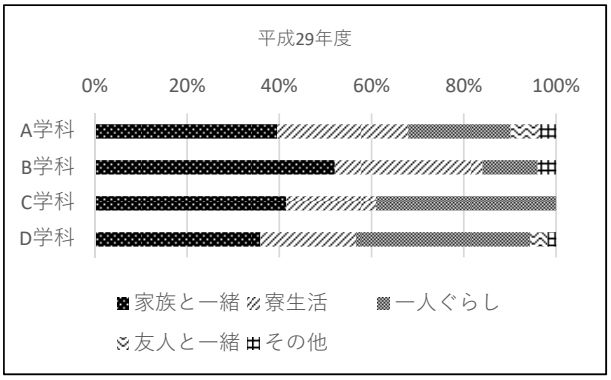
12.　オープンキャンパスに参加しましたか？

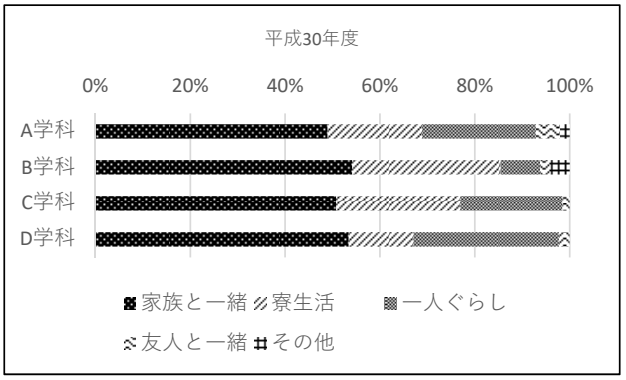




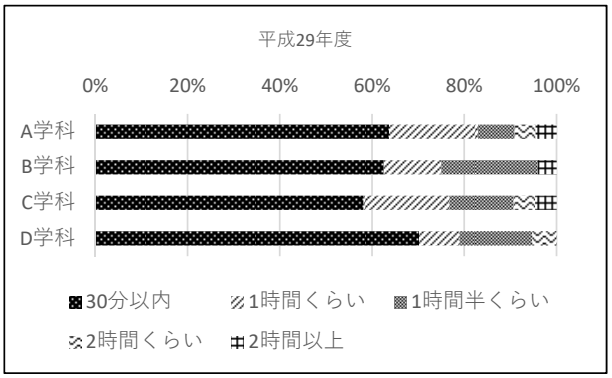
「参考資料 2」

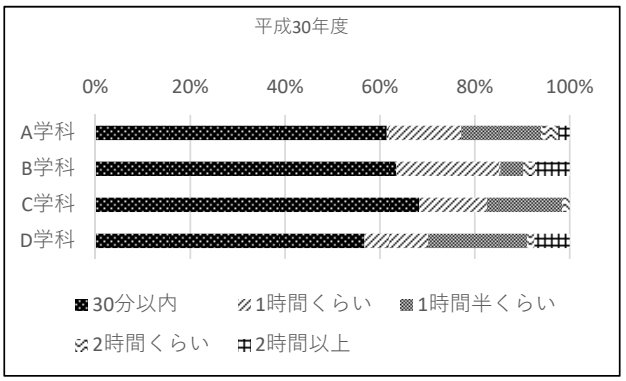
13. 現在のくらしは？



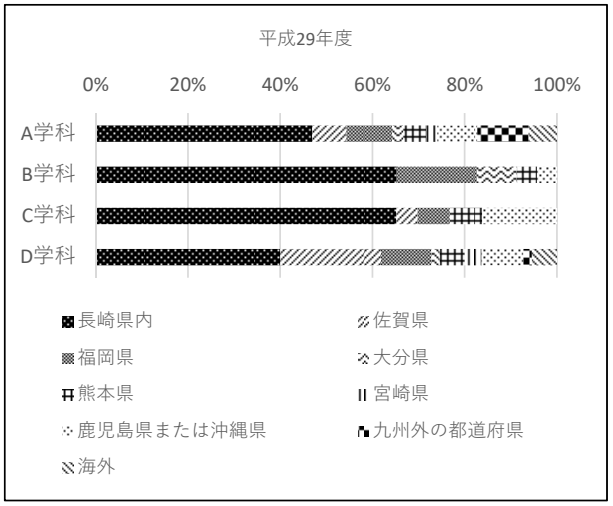


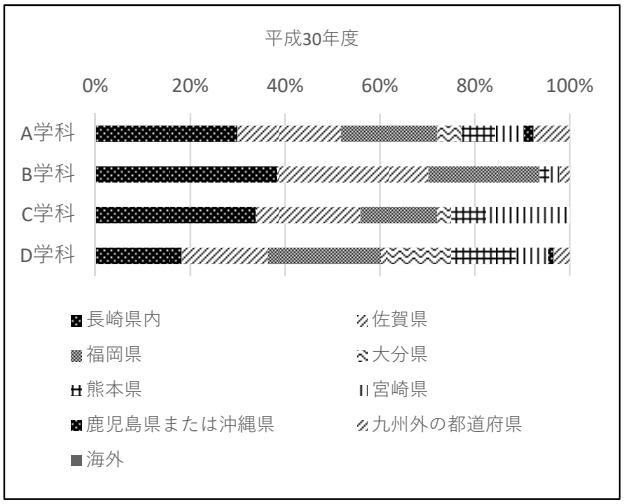
14. 通学時間は？



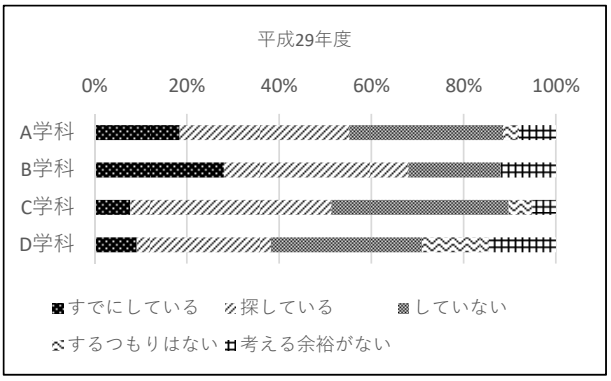


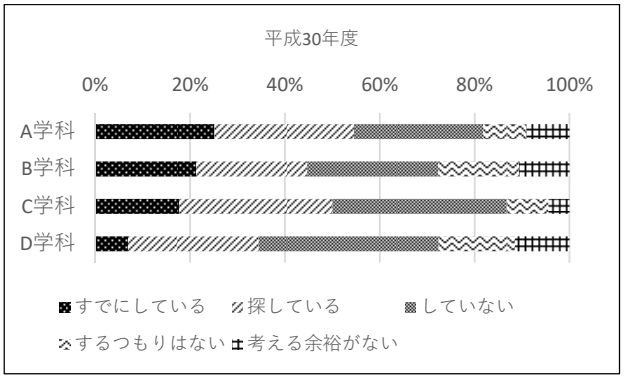
15. 出身は？





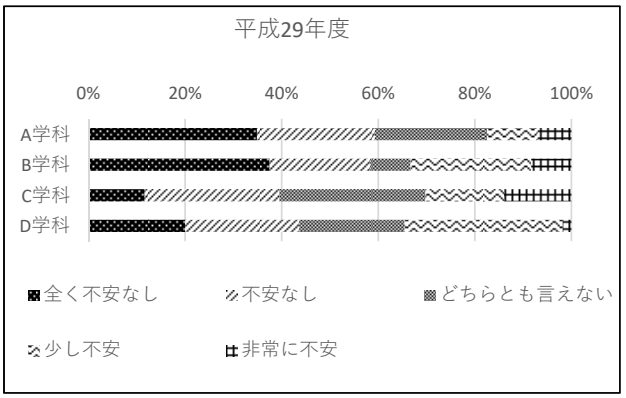
16. バイトは？

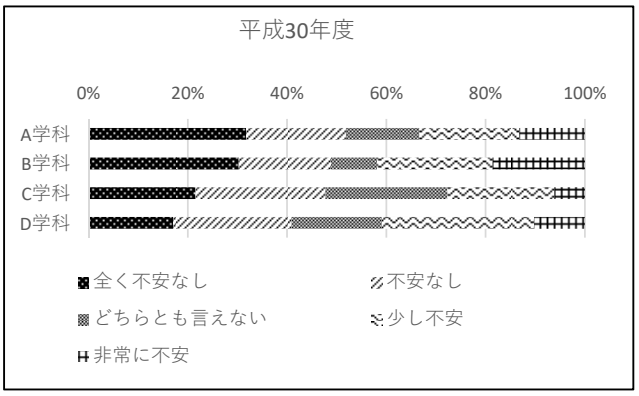




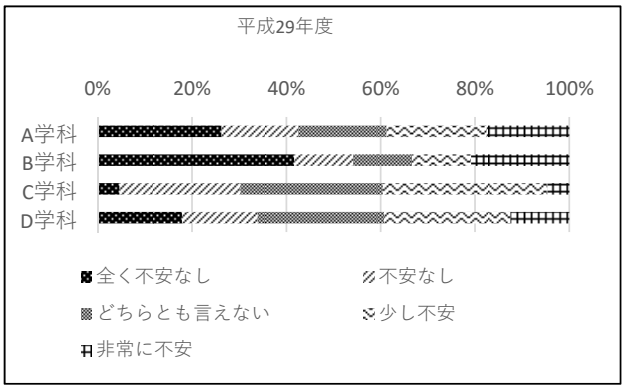
「参考資料 2」

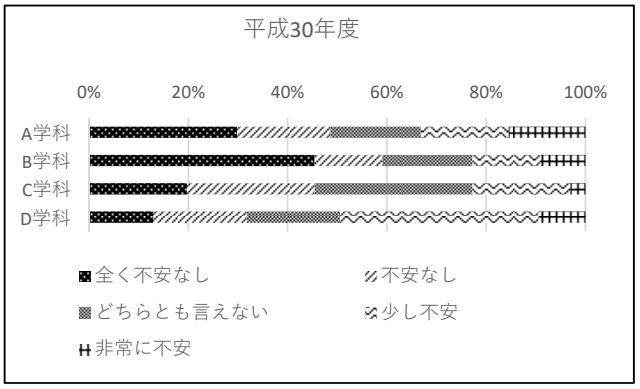
17.　体への不安は？



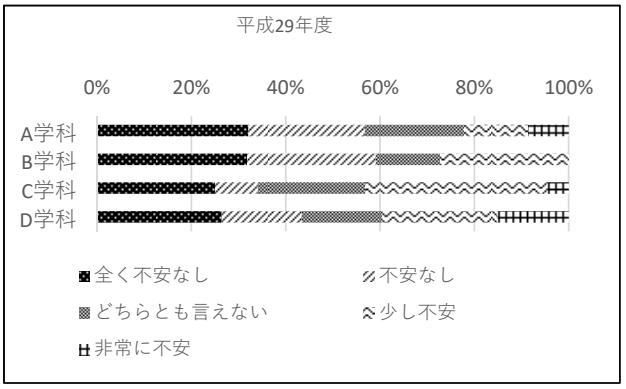


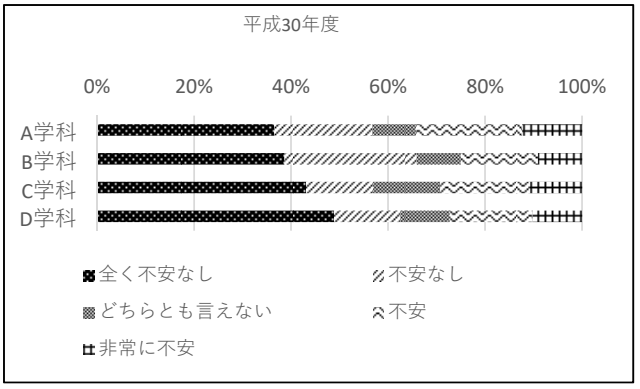
18.　精神的な不安は？



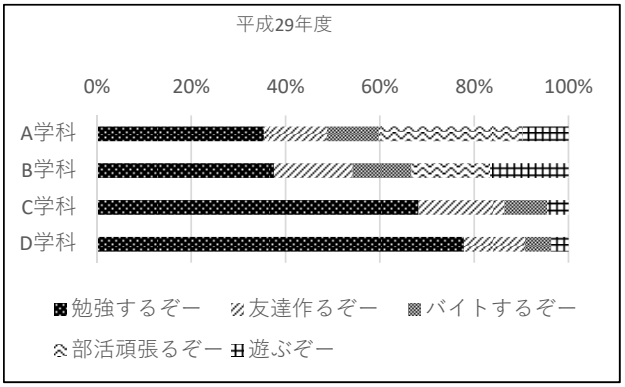


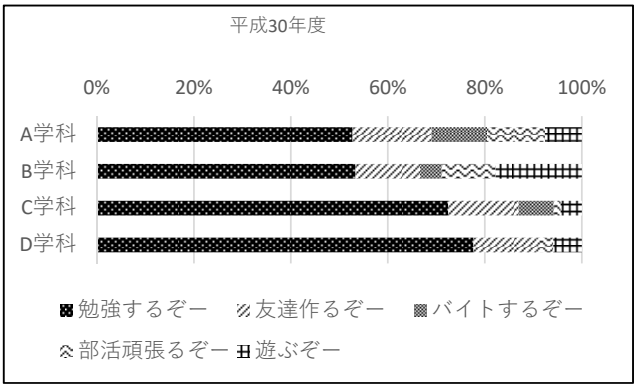
19.　現在のくらしは？





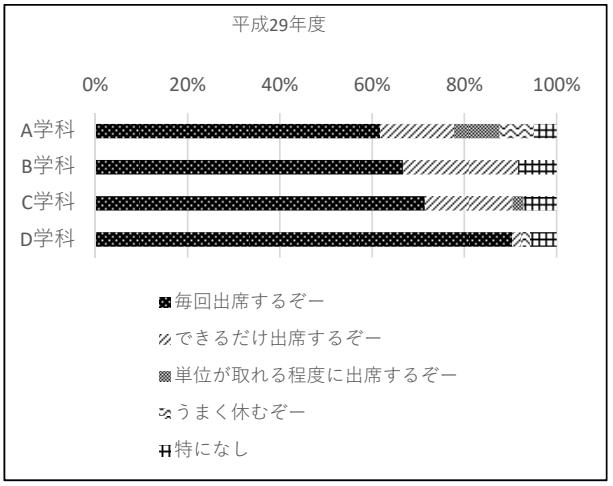
20.　これからのキャンパスライフへの抱負は？

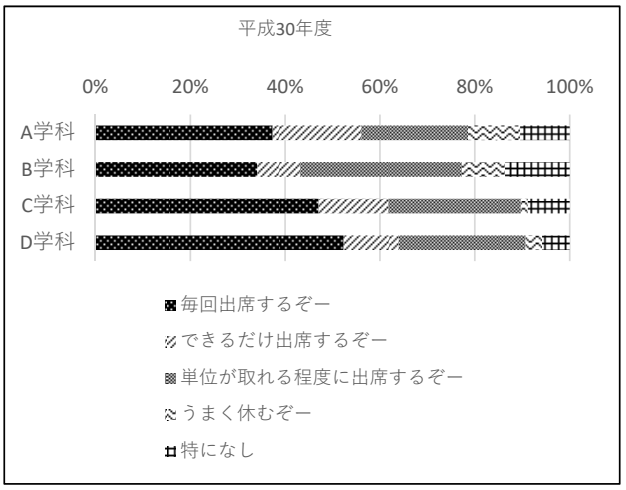




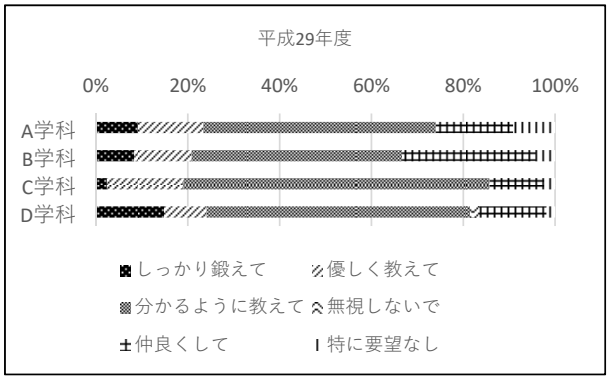
「参考資料 2」

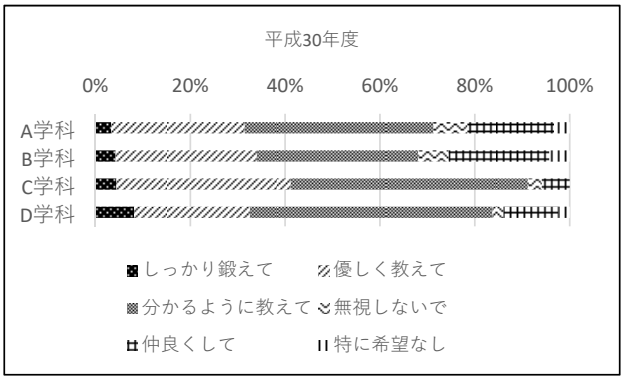
21.　授業への抱負は？



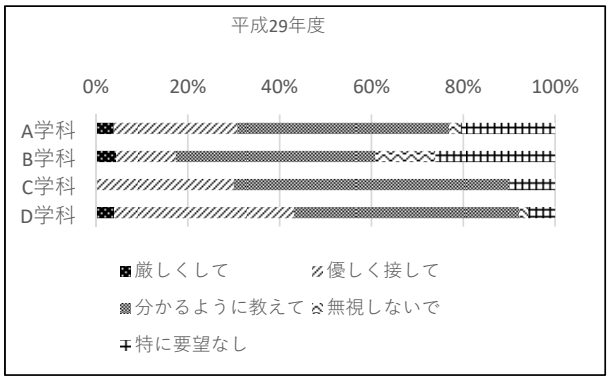


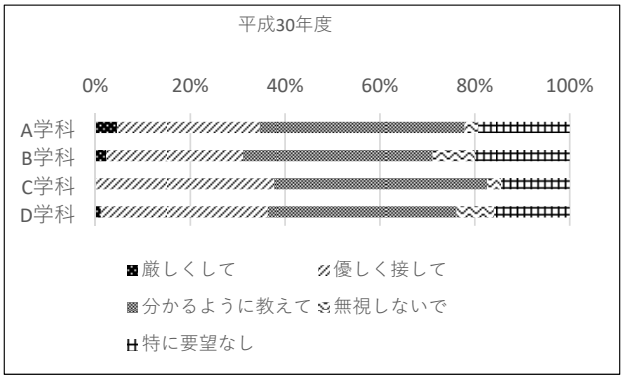
22.　先生方への要望は？



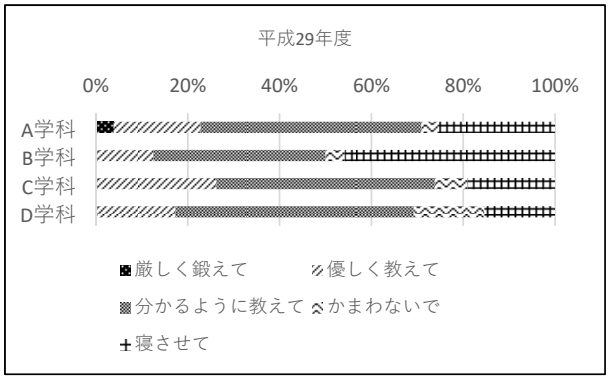


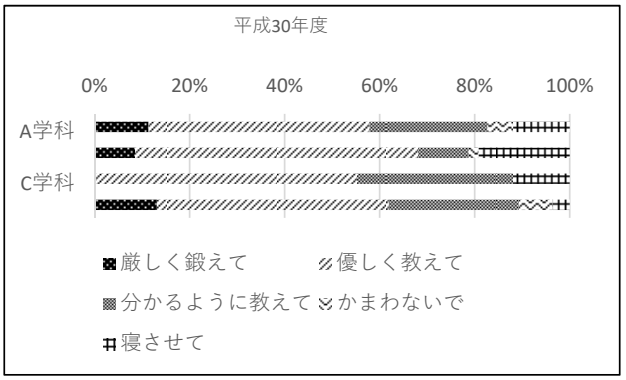
23.　事務職員の方々への要望は？





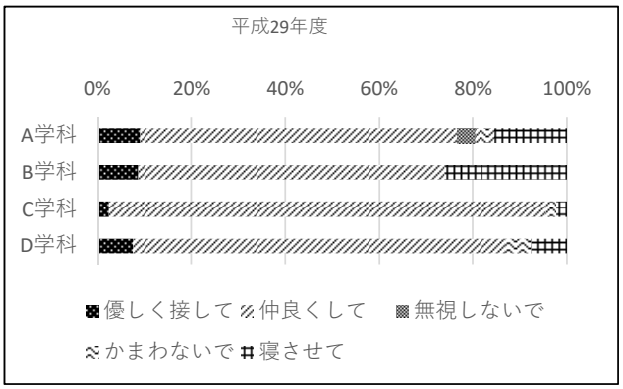
24.　本授業への要望は？

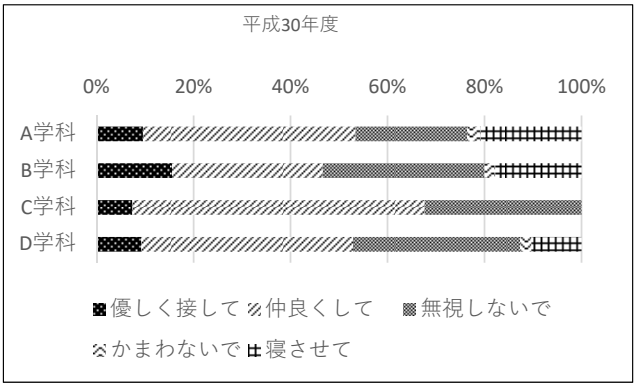




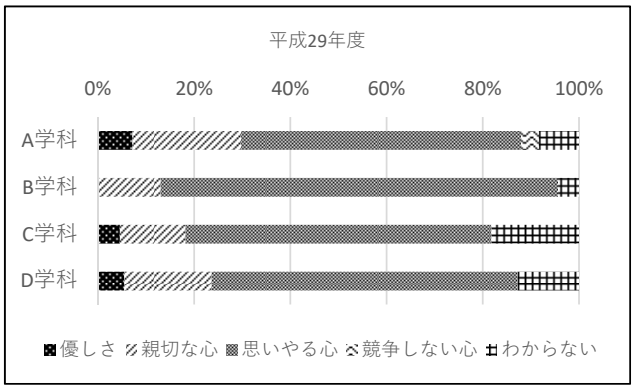
「参考資料 2」

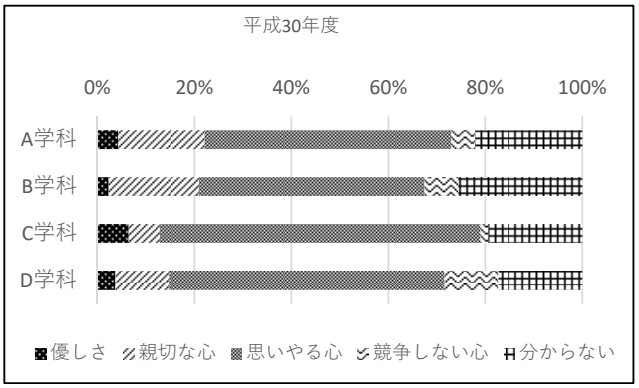
25.　クラスの皆さんへの要望は？





26.　ところで、ホスピタリティとは何でしょう？





「参考資料 3」

アンケート調査結果（平成 29 年度～30 年度）

以下に掲げるデータは、質問項目の平均評定値と SD 値である。本文中での記述は、各項目の平均評定値について、開講年度（平成 29 年度・平成 30 年度）×学科（A 学科、B 学科、C 学科、D 学科）の 2 要因の分散分析を行った結果である。

1.理事長や学長の講義で、本学がホスピタリティの育成を重視している理由が分かった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.1	0.9	4.0	0.8	4.0	0.9
B	3.9	1.0	4.0	1.0	3.9	1.0
C	3.9	0.9	4.2	0.7	4.1	0.8
D	4.3	0.9	4.2	0.7	4.2	0.8
合計	4.1	0.9	4.1	0.8	4.1	0.9

2.理事長や学長の講義は、新鮮に聞くことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.0	0.9	3.9	0.8	3.9	0.9
B	3.8	1.0	4.0	1.0	3.9	1.0
C	3.7	0.9	4.0	0.7	3.9	0.8
D	4.1	1.0	4.0	0.8	4.0	0.9
合計	3.9	1.0	3.9	0.8	3.9	0.9

3.ホスピタリティの起源と文化の講義は、興味深く聞くことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.9	3.6	0.9	3.7	0.9
B	3.7	0.9	3.7	1.1	3.7	1.0
C	3.4	0.9	3.8	0.8	3.6	0.9
D	4.0	1.0	3.8	0.8	3.9	0.9
合計	3.8	1.0	3.7	0.9	3.7	0.9

4.ホスピタリティの起源と文化の講義で、その歴史や意味が分かった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.8	3.6	0.9	3.7	0.8
B	3.7	0.9	3.9	1.0	3.8	0.9
C	3.7	0.7	4.0	0.7	3.8	0.7
D	4.0	0.9	4.0	0.8	4.0	0.8
合計	3.9	0.8	3.8	0.8	3.8	0.8

5.プレゼンテーションについての講義は、楽しく聞くことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.1	0.9	3.8	1.0	3.9	0.9
B	4.0	1.0	4.0	1.0	4.0	1.0
C	4.0	0.9	4.1	0.9	4.1	0.9
D	4.3	0.9	3.9	0.9	4.1	0.9
合計	4.1	0.9	3.9	1.0	4.0	1.0

6.プレゼンテーションの講義で、その意義や方法が分かった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.0	0.9	3.9	0.9	3.9	0.9
B	4.0	0.9	3.9	1.0	3.9	1.0
C	4.0	0.9	4.2	0.7	4.1	0.8
D	4.2	0.9	4.2	0.8	4.2	0.9
合計	4.1	0.9	4.0	0.9	4.0	0.8

7.オープンキャンパスへの提案を考える授業では、自分の意見を言えた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.7	1.0	3.7	1.1	3.7	1.0
B	3.9	1.2	4.0	1.1	3.9	1.2
C	3.8	0.8	4.2	0.8	4.0	0.8
D	3.9	1.1	4.0	1.0	4.0	1.0
合計	3.8	1.0	3.9	1.0	3.9	1.0

8.オープンキャンパスへの提案のような具体的な活動ができる授業は、有意義である。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	0.9	3.7	1.0	3.8	0.9
B	4.0	1.0	3.9	1.1	3.9	1.1
C	3.5	0.9	4.0	0.7	3.8	0.8
D	4.0	1.0	3.8	0.9	3.9	1.0
合計	3.8	0.9	3.8	0.9	3.8	1.0

「参考資料 3」

9.オープンキャンパスへの提案の授業は、楽しかった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.7	0.9	3.6	1.1	3.8	0.9
B	3.7	1.1	3.8	1.2	3.9	1.1
C	3.4	0.9	3.8	0.7	3.8	0.8
D	3.8	1.2	3.7	1.1	3.9	1.0
合計	3.7	1.0	3.7	1.0	3.8	1.0

10.教員や事務の方々による仕事でのホスピタリティの話は、興味深く聞くことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	0.9	3.8	0.8	3.9	0.9
B	3.9	1.1	3.9	1.0	3.9	1.0
C	3.7	0.9	4.1	0.8	3.9	0.9
D	4.1	0.9	3.8	0.9	4.0	0.9
合計	3.9	0.9	3.8	0.9	3.9	0.9

11.教員や事務の方々による仕事でのホスピタリティの話は、役に立った。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	0.9	3.8	0.8	3.8	0.9
B	3.8	0.9	4.0	1.0	3.9	1.0
C	3.7	0.9	4.1	0.7	3.9	0.8
D	3.9	1.0	3.7	0.9	3.8	0.9
合計	3.9	0.9	3.8	0.9	3.8	0.9

12.外国生まれの教員や事務の方々のホスピタリティの講義は、新鮮に聞くことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.1	0.9	4.0	0.9	4.0	0.9
B	3.9	1.0	4.0	1.0	4.0	1.0
C	3.9	0.8	4.3	0.7	4.1	0.8
D	4.2	0.9	4.1	0.8	4.2	0.8
合計	4.1	0.9	4.1	0.8	4.1	0.9

13.外国生まれの教員や事務の方々のホスピタリティの講義は、有意義だった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.0	0.9	3.9	0.9	4.0	0.9
B	3.8	1.0	3.9	1.0	3.8	1.0
C	3.7	0.8	4.1	0.7	3.9	0.8
D	4.0	1.0	4.1	0.9	4.1	0.9
合計	3.9	0.9	4.0	0.9	4.0	0.9

14.ホスピタリティの自己診断の授業は、興味深く受けることができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	0.9	3.4	0.9	3.6	0.9
B	3.8	1.0	3.5	1.0	3.7	1.0
C	3.3	0.9	3.7	0.7	3.5	0.8
D	3.8	1.2	3.5	1.0	3.7	1.1
合計	3.7	1.0	3.5	0.9	3.6	1.0

15.ホスピタリティの自己診断は、役に立つと思う。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.7	1.0	3.6	1.0	3.7	1.0
B	3.7	1.0	3.8	1.1	3.7	1.0
C	3.3	1.0	3.9	0.8	3.6	0.9
D	3.7	1.1	3.6	0.9	3.6	1.0
合計	3.6	1.0	3.7	1.0	3.7	1.0

16.この授業で、他学科の人とおしゃべりする機会を持つことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.9	3.7	1.0	3.7	1.1
B	3.6	1.1	3.9	1.1	3.6	1.3
C	3.4	1.0	4.0	1.0	3.6	1.2
D	3.6	1.0	3.8	1.0	3.6	1.2
合計	3.5	1.2	3.8	1.1	3.6	1.2

「参考資料 3」

17.この授業で他学科の人の意見を聞くことができて有意義だった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.9	3.7	1.0	3.8	1.0
B	3.5	1.1	3.9	1.0	3.7	1.1
C	3.4	0.9	4.0	0.8	3.7	0.9
D	3.6	1.1	3.8	0.9	3.7	1.0
合計	3.7	1.0	3.8	1.0	3.7	1.0

18.この授業で、教員の他に事務の方がお世話してくれたのは良かった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	1.0	3.7	0.9	3.8	0.9
B	3.9	0.9	3.8	0.9	3.9	0.9
C	3.6	0.9	3.9	0.8	3.8	0.8
D	3.8	1.0	3.8	0.9	3.8	0.9
合計	3.8	1.0	3.8	0.9	3.8	0.9

19.この授業で、事務の方が少し身近に思えるようになった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	1.0	3.4	0.9	3.6	0.9
B	3.6	1.0	3.7	0.9	3.6	1.0
C	3.6	0.9	3.6	0.9	3.6	0.9
D	3.7	1.0	3.5	1.0	3.6	1.0
合計	3.7	1.0	3.5	0.9	3.7	0.9

20.この授業の受講生数は適切だった。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.8	0.9	3.6	0.9	3.7	0.9
B	3.6	1.1	3.7	0.9	3.6	1.0
C	3.7	0.9	3.8	0.8	3.7	0.8
D	3.7	1.0	3.8	0.9	3.8	0.9
合計	3.8	0.9	3.7	0.9	3.7	0.9

21.この授業では自分で考える時間を持つことができた。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	4.0	0.9	3.7	0.9	3.8	0.9
B	3.8	0.9	3.9	1.0	3.8	0.9
C	3.6	0.8	3.9	0.7	3.8	0.7
D	3.9	1.0	4.0	0.7	3.9	0.8
合計	3.8	0.9	3.8	0.9	3.8	0.9

22.自分としては、この授業に積極的に参加した。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.7	1.0	3.7	0.9	3.7	0.9
B	3.6	1.0	3.7	1.1	3.6	1.1
C	3.6	0.8	4.0	0.8	3.8	0.8
D	3.9	0.9	4.0	0.9	3.9	0.9
合計	3.7	0.9	3.8	0.9	3.8	0.9

23.ホスピタリティを理解するうえで、この授業は今までのところ合格点を与えることができる。

学科	平成 29 年度		平成 30 年度		合計	
	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*	$\bar{X}$	*SD*
A	3.9	0.8	3.7	0.8	3.8	0.8
B	3.6	1.0	3.7	1.0	3.7	1.0
C	3.5	0.8	3.9	0.8	3.7	0.8
D	3.8	0.9	4.0	0.7	3.9	0.8
合計	3.7	0.9	3.8	0.8	3.8	0.8